

【引用・参考文献】

- 大野薰 1989 「地形土製品小考」『大阪文化財論集』（財）大阪文化財センター
- 河口貞徳 1963 「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』第18号 九州考古学会
- 小林康男 1981 「磯文・弥生の地形土製品」『信濃』第33巻 第7号 信濃史学会
- 佐原真 1996 「食の考古学」東京大学出版社
- 新里貴之 2004 「沖縄諸島の土器」『考古資料大観』第12巻 小学館
- 角南聰一郎 2001 「四国の底・杓形土製品」「旧練兵場遺跡」普通寺市・（財）元興寺文化財研究所
- 出口浩 1978 「（7）小結」「萩原遺跡」始良町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 中尾佐助 1972 「料理の起源」日本放送出版協会
- 長野賀一 1994 「第3章 調査の概要」「保養院遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（11）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中村直子 2005 「古墳時代の遺物について」『鹿児島大学埋蔵文化財調査年報』19 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 西園勝彦 2005 「第VI章 発掘調査のまとめ」「山下堀頭遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（92）鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 東和幸 1992 「第IV章2. 挖り込み」「鳥ノ巣遺跡（他6遺跡）」大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）大根占町教育委員会

（黒川忠広）

（2）古墳時代の棒状礫について

当遺跡からは、Ⅲ^g層中及び竪穴住居跡内から棒状礫が集中して検出されている。このような遺構あるいは状態に関して、南九州においてわずかではあるが確認されており、ここでまとめてみたい。

鹿児島県下で確認されている遺跡を表27に示した。古くは、辻堂原遺跡の48号住居で、「河原石として6点余りがまとまっている」と記述され写真が掲載されている。当遺跡の上流に位置する川辺町古市遺跡では、3号竪穴住居跡の埋土中から20点余り棒状礫が出土している。また、宮崎県においても都城市坂元B遺跡や延岡市吉野第2遺跡などにおいても出土している。都城市坂元B遺跡を報告した柔糸光博氏は、「特別な加工痕の認められない自然礫が10点ほど出土」し、「これらはすべて重さ1.4～2kgの中に収まる」とデータ分析を実施している（畑2006）。吉野第2遺跡を報告した日高広人氏は、「10～15cm規模の棒状の砂岩礫が10数点認められる。そのうちの1点については、敲打痕が認められるが、他のものには使用痕や加工痕等は認められなかった」と述べている（日高2007）。また、中村直子氏は「住居跡床面に、ほぼ同じ大きさの河原石を複数個まとめて置いていた遺構も確認されている」と注意を払っている（中村2006）。

表27 棒状礫出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構名称等
1	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬	6号住 8号住 包含層集積
2	古市遺跡	南九州市川辺町	3号住
3	堂原遺跡B地点	南九州市川辺町神殿	住居内
4	辻堂原遺跡	日置市吹上町花熱里	48号住
5	鹿大構内遺跡	鹿児島市郡元町	
6	永野原遺跡	肝付町（高山町）後田永野原	1号住 2号住 5号住
7	保養院遺跡	姶良郡姶良町平松	包含層集積2基
8	軍宮下遺跡	鹿屋市吾平町上名	13T包含層集積

はじめに、当遺跡の棒状礫の概要を述べておきたい。上水流遺跡出土の棒状礫は、周辺で比較的容易に獲得できる頁岩系の石材が大半を占め、その名称通り棒状を呈する。その長さと重量は、表1・2の通りである。これで見ると、長さは13～15cm、重さは400～500gに分布が集中する。また、感覺的に握り易く両端に敲打痕が認められる資料もある。だが、その数は總出土点数に対して25%と決して多くはない。このことから、密窓に全てが敲打具であるとは言い切れない部分もある。このような状況であるが、敲打を有する部分が比較的平面を形成しているため、握り下ろす敲打と言うよりは、むしろ、上から潰すような敲きが多かったという可能性も考えられる。また、敲打面がわずかがら赤化しており、高温の状態のものを対象物としていた可能性もある。

ここで、川辺町古市遺跡資料を参照したい。表28は、長さと重さについて示したものである。この表から当遺跡の傾向と近似していることがわかる。残念ながら他の遺跡資料についてデータを作成するには至らなかったが、棒状礫の集中には目的があった点を指摘することが出来ない。加えて、これらの棒状礫は全体的にトロッとして光沢を持つものが多い。これは、直接手で握ると言うよりは、むしろ手袋や革などを介して握り敲打を行っていたとは考えられないだろうか。

さて、棒状礫の用途について述べるにあたり、先述した敲打面の赤化現象に注目したい。礫素材のもので赤化現象が見られるのは、他に、7号住出土の台石があり、その中央部分には赤化現象が看取される。このような事例としては、高山町水野原遺跡が挙げられよう。ここでは、鉄砧石としての台石や鉄滓あるいは高杯転用羽口などが出土し、「鍛造による小規模な鉄器生産」が指摘され、「敲石・台石などを鍛冶具として使用する弥生時代の鉄器生産形態」であるとしている（角南2000）。当遺跡では、肝心の鉄滓などの資料は出土していない。これは、調査段階での視点の欠如であり、竪穴住居跡内埋土のふるいかけは実施しているが、磁石等によるサンプ

表28 古市遺跡2号住居内出土縄

番号	重量 (kg)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
1	0.22	13.1	5.7	2.9	
2	0.46	13.1	7.0	4.5	
3	0.27	14.5	4.2	3.6	
4	0.56	16.8	6.7	5.2	
5	0.42	14.2	6.0	3.9	
6	0.44	15.2	5.8	4.2	
7	0.34	13.2	6.2	3.3	
8	0.30	13.6	5.0	3.4	
9	0.38	14.2	5.5	3.9	
10	0.44	13.7	6.8	4.3	
11	0.48	13.0	7.0	4.0	
12	0.40	13.3	5.6	3.6	
13	0.64	15.8	5.8	5.2	
14	0.22	13.2	3.4	3.3	
15	0.40	13.7	4.0	2.9	
16	0.42	14.7	4.7	2.5	
17	0.20	10.3	4.5	2.4	
18	0.56	13.9	6.5	6.1	
19	0.30	16.5	5.1	2.2	
20	0.70	19.5	6.1	3.4	

リングを実施していないという点に尽きる。今後、調査の視点として留意して行かなくてはならない。事実、5号住からは擒縄も出土しており、古墳時代における鉄器生産の視点も視野に入れながら棒状礫を捉えて行かなくてはならないであろう。また、各住居には焼土が検出されている。屋内炉の可能性を想定しながら調査・報告を行ってきたが、2号では2箇所に、4号では著しい赤化現象が確認できている。これらの現象についても、1つの可能性に限定せずに幅広く捉える必要があるのかも知れない。

鹿児島県内における古墳時代の製鉄遺跡というと、先に挙げた高山町永野原遺跡や指宿市尾長谷迫遺跡が著名であるが、検出例は極めて少ない。さらに、尾長谷迫遺跡は笹貫段階に属し6世紀代が想定されている。当遺跡の資料は、笹貫段階を含んでいるものの笹貫段階でも比較的古い様相が残っている。幸いなことに須恵器が伴っており、これらの資料から見ると5世紀後半代であると思われ、製鉄や鉄器などを中心に考察を行う上では極めて重要な資料になると思われる。これらの点に関しては、川辺町堂園遺跡でも類似する事例が確認されており、類例の増加が期待出来る。

さて、ここで注目したい遺物がある。8号住出土の砥石である。横軸断面観が台形状を呈し、各面に長軸方向への擦痕が認められ、素材中央部分に向かって薄くなる点は、鉄を対象とした砥石である可能性が考えられる。この石材は、いわゆる天草砥石であり、近隣では吹上町辻堂原遺跡で出土例がある。報告の中で池畠耕一氏は、「砥石は荒砥、中砥、仕上げ砥と三種みられ鋼鉄の可能性や原産地との交流関係にも注目」が必要と指摘している（池畠1977）。時期は下るが、金峰町小中原遺跡で

表29 天草砥石出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代		
			古墳	古代	中世
1	上水流遺跡	南さつま市金峰町	●		
2	持林松遺跡	南さつま市金峰町			●
3	小中原遺跡	南さつま市金峰町		●	
4	辻堂原遺跡	日置市吹上町	●		
5	下水泊遺跡	日置市伊集院町		●	
6	城下遺跡	薩摩川内市本次町城下			●
7	上野城跡	薩摩川内市百次町上野			
8	計志加里遺跡	薩摩川内市中郷町		●	
9	大島遺跡	薩摩川内市東大小路町		●	
10	成岡遺跡	薩摩川内市中福良町	●		
11	大坪遺跡	出水市黄金町・美原町		●	
12	小山遺跡	鹿児島市吉田町			●

は古代の出土例があり、薩摩川内市周辺では、計志加里遺跡や大島遺跡など古代から中世にかけての遺跡で出土している。このように、天草砥石及びその可能性のある資料は、薩摩半島に多い傾向がうかがえ、時期的な問題も含めて今後検討して行かなくてはならない資料と考えられる。

以上、当遺跡資料を基に類例を検討し、極小規模な製鉄に関連する遺物の可能性を指摘することが出来た。このような棒状礫は、意外にも該期の堅穴住居跡内から出土しているようである。明確な使用痕などの確認が困難であるなどの理由からその位置付けについては不明の状態が続いている。今回、1つの可能性を指摘することが出来たが、これを検証するためにも、小鉄片の採取など調査中に取り組むべき課題も示すことが出来た。今後、その他の可能性も視野に入れながら検討を重ねていきたい。

最後に、村上恭通氏には遺跡の性格付けを左右する重要な御教示を得ることが出来た。末筆ながら感謝したい。

【引用・参考文献】

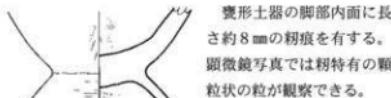
- 池畠耕一 1977 「第5章遺物」「辻堂原遺跡」吹上中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 柔畠光博 2006 「坂元A遺跡ほか」都城市文化財調査報告書 第71集
- 角南聰一郎 2000 「IV小結」「永野原遺跡」高山町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 日高広人 2007 「第3節古墳時代」「吉野第2遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（155）
- 中村直子 2005 「古墳時代の遺物について」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』19 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 中村直子 2006 「第4章 古墳時代」「古史・古代の鹿児島遺跡解説（通史編）」鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 「古市遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（89）

（黒川忠広）

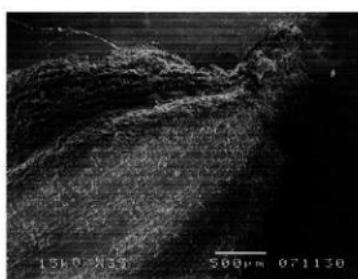
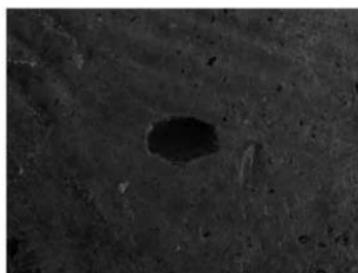
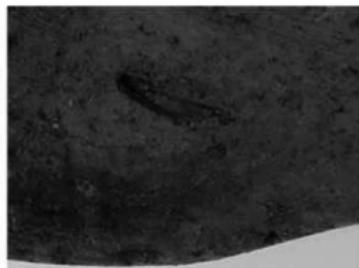
第3節 上水流遺跡における種子圧痕

今回の整理作業において、糊や種子の圧痕を有する土器が5点確認された。そのうち2点は第3章で紹介している住居内遺物である。その他の3点は本報告書では図化していない。ここで写真とともに紹介したい。写真は圧痕のレプリカを作成し、電子顕微鏡で撮影した。レプリカ作成。顕微鏡写真撮影には永瀬功治氏の協力を得た。

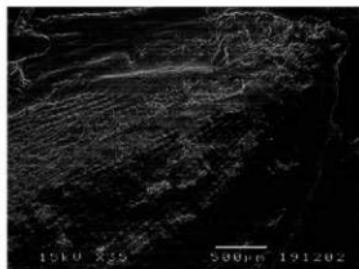
1 10号住居内遺物（第51図14）



第203図 14の土器実測図



図版47 4のレプリカ電子顕微鏡写真

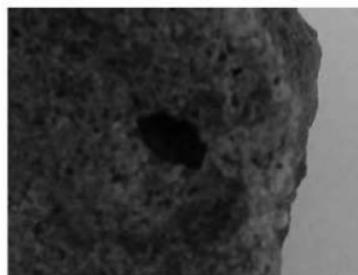


図版45 14のレプリカ電子顕微鏡写真

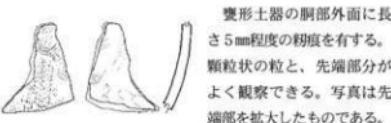
3 その他の資料

(1) 圧痕資料1

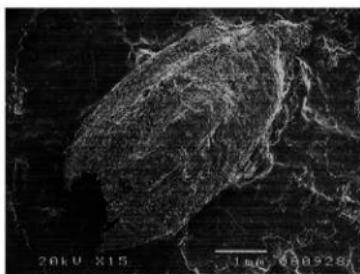
II層出土の成川式土器である。脚を有する菱形土器の底部であると考えられる。内面に長さ6mm程度の圧痕が認められる。レプリカの顕微鏡写真による全体的な形状や表面の起伏の状況からみて糊度であると考えられる。



2 2号住居内遺物（第13図4）



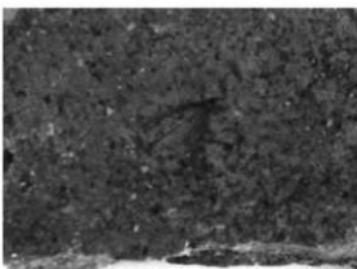
図版49 4の土器実測図



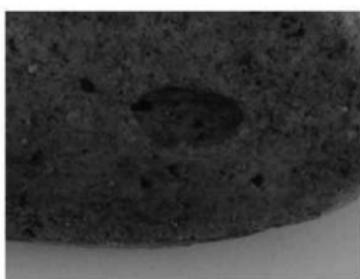
図版49 圧痕資料1のレプリカ電子顕微鏡写真

(3) 圧痕資料3

IV層出土の成川式土器である。外面に長さ約7mmの種子圧痕が確認できる。先端部が尖り、表面の起伏は乏しい。具体的に特定することができなかつたが、何かの種子痕であろう。



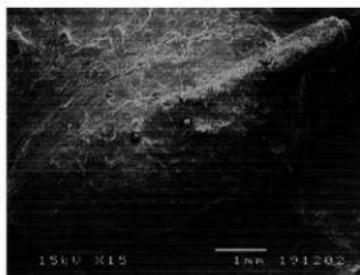
図版52 圧痕資料3の圧痕部分拡大写真



図版50 圧痕資料2の圧痕部分拡大写真



図版53 圧痕資料3のレプリカ電子顕微鏡写真



図版51 圧痕資料2のレプリカ電子顕微鏡写真

第4節 粉圧痕から見た南九州における初期農耕の様相

(1) はじめに

本遺跡において古墳時代の遺物中に粉圧痕を有すると考えられる土器が3点認められた。万之瀬川流域においては本遺跡下流にある持林松遺跡において弥生時代後期～終末期にかけての甕型土器に粉圧痕と思われる圧痕が2点確認された。本節では粉圧痕を有する土器の出土状況から南九州の初期農耕の様相を考察したい。

(2) 粉圧痕を有する土器について

土器の製作過程で何らかの原因で焼成前に粉が付着し、その圧痕が残ったものと思われる。粉痕は口縁部、胴部、底部など土器のあらゆる部位に付着している。戦前からその存在は知られており、弥生時代農耕開始論を補強する資料として取り上げられてきた。しかし発掘調査の増加に伴い、粉痕を有する縄文時代の遺物も見られるよう

になった。イネは本来から日本にあった訳ではなく、このような稻痕が土器に存在するということは、その土器が製作される以前までにイネが伝播しているということがいえる。このような圧痕資料はイネの伝播ルート、農耕の開始時期、農耕の伝播の様相などを解明するうえでの格好の資料となりうる。

(3) 南九州における稻痕資料

稻痕の資料は全国的に存在するが、南九州における稻痕の出土報告を調査した(表30)。調査は南九州地域の発掘調査報告書に基づいて行った。実測図、拓影、図版、観察表等の記述から、稻痕と報告されているものを取り上げた(註1)。報告書には稻痕の記述がなくとも拓影、図版等から稻痕を有する可能性がある遺物も見られたが、遺物を実見できなかったため今回は取り上げなかった。表示した遺物以外にも稻痕の資料が存在する可能性を指摘するにとどめた(註2)。

稻痕は圧倒的に古墳時代に多い。今後縄文時代晩期から弥生時代にかけての資料が増加することによって南九州における初期農耕の様相を解明することができる。現在までの資料からいえることの傾向について若干の所見を述べる。

都城市の遺跡を除いていずれの遺跡も標高60~130mの台地状に立地する。また、水田遺構等は確認されていないことなどから、これらの遺跡では陸稲農耕が行われていたと推測する。南九州内の水田遺構が発見された遺跡としては鹿児島市の鹿児島大学構内遺跡や薩摩川内市の京田遺跡などがあるが、いずれも標高が低く湿地である。このような一部の水田に適した場所以外は陸稲農耕が営まれていたのではなかろうか。水田を営むには水路

や畦

が十分に確保できることなどの条件が整っていることがの設営などの大規模な共同作業が必要であることと用水必要である。しかしながら、南九州ではこれらの条件は整へにくかったのであろう。そしておそらくは水の確保がもっとも難しかったのではなかろうか。本遺跡においても10軒以上の住居跡が存在する集落遺跡にもかかわらず当時の水田耕作をうかがわせる遺構が検出されなかつたことは、労働力不足以上に水の確保が難しかったことが推測できる。

また稻痕の分布状況を図1に示した。この図を見る限りでは地域的な極端な偏りは見られない。古墳時代までには南九州全域で営まれていたことが伺える。しかし弥生時代の稻痕となると薩摩半島と都城盆地周辺に限られている。資料数が少ないため現時点での判断は避けるが、今後の資料の増加とともに弥生時代の稻作の様相、稻作の伝播ルートが解明できることを期待したい。

分布状況に関してもう1点あげると、南九州本土においてはほぼ全域に分布すると考えられるが、南西諸島の遺跡からは稻痕が確認されなかった。しかし、報告書の図版等に種子痕らしきものが数点見られる。現時点では南西諸島における初期稻作農耕を伺わせる資料は確認できなかったが、これらの資料を精査することにより南西諸島の農耕の様相あるいはイネの伝播ルートについて重要な手がかりが得られる可能性もあることを指摘しておきたい。

(4) 圧痕の観察について

土器を観察し稻圧痕の有無を確認することは、ウォー

表30 稻痕出土報告書一覧

番号	遺跡名	市町村名(現)	時代	文献
1	坂本 A・B	都城市	弥生	註3
2	黒土	都城市	縄文晩期	註4
3	上中段	曾於市	縄文晩期	註5
4	妻之浦貝塚	薩摩川内市	古墳	註6
5	市ノ原	日置市	縄文晩期~古墳	註7
6	高橋貝塚	南さつま市	弥生前期	註8
7	下原	南さつま市	縄文晩期	註9
8	持附松	南さつま市	弥生後期	註9
9	上水流	南さつま市	古墳	註10
10	上加世田	南さつま市	弥生・古墳	註11
11	山下堀頭	鹿児島市	弥生終末	註12
12	鹿大構内	鹿児島市	弥生	註13
13	中原	鹿屋市	古墳	註14



図203 南九州稻痕分布状況

ターフローテーション法による遺存体の検出や植物珪酸体分析によるイネのプラントオバール検出により容易にイネの存在を確認できる手法であると考える。ただ筆者は耕痕を判断する際は肉眼だけに頼らず、レプリカを電子顕微鏡で観察した。かつて肉眼で耕痕と判断していたが実は耕痕どころか種子の圧痕でもなかったという経験があったからである。耕痕あるいは種子痕らしい資料については、今後レプリカを顕微鏡で観察した結果をふまえて報告することが望ましいと考える。これらの資料の蓄積から当時の生活環境や文化の伝播について多くの情報を得ることができると期待したい。

【註】

- 1 旧東郷町（現薩摩川内市）坂ノ下遺跡の報告書では耕痕を有する古代遺物が掲載されている。また旧下甑村（現薩摩川内市）大原・宮脇遺跡の報告書では時代不明であるが耕痕の図版が掲載されている。今回は、縄文時代～古墳時代の遺物を対象として、古代あるいは時代不明のこれらの遺跡は取り上げなかった。また、志賀加里遺跡（薩摩川内市）や上水流遺跡（南さつま市）では縄文時代後期の土器片に種子圧痕が確認されたが耕痕と判断できなかった。
- 2 大口市大田遺跡報告書で縄文時代後期土器（西平式土器）の口縁部に種子痕らしきものを図版で確認した。
- 3 宮崎県都城市教育委員会2006『坂元A遺跡・坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集。
- 4 宮崎県都城市教育委員会1994『黒島遺跡』都城市文化財調査報告書第28集。
- 5 末吉町立埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 6 川内市土地開発公社1997『麦之浦貝塚』
- 7 鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『市ノ原遺跡（第5地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)
- 8 河口貞徳1963『鹿児島県高橋貝塚発掘概報』『九州考古学』18号
- 9 九州考古学会（後に「河口貞徳先生古希記念著作集」）上巻、1981年に再録
- 10 鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）
- 11 本報告書
- 12 加世田市教育委員会1985『上加世田遺跡1』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）加世田市教育委員会1987『上加世田遺跡2』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 13 鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『山下屋場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（92）
- 14 第一次花熱帯遺跡調査報告書（『鹿児島考古』第5号）に「かつて鹿児島市立埋蔵文化財博物館構内から発見された生糸後期の土器に印するさざな正丸は耕痕である」という記述がある。
- 15 鹿児島県肝属郡都谷平町教育委員会1985『大牟礼遺跡ほか3遺跡』都谷平町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

【参考・文献】

- 1 鹿児島県大口市教育委員会2005『大牟田遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書（24）
- 2 鹿児島県薩摩郡東郷町教育委員会2002『坂ノ下遺跡』東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
- 3 金閑惣一・大友府立弥生文化博物館編1995『弥生文化の成立』角川選書
- 4 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『志賀加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（38）
- 5 川口雅之2004『南九州における穀作文化と木製品』『月刊文化』11月号
- 6 煙光博2004『照葉樹林地帯・シラス地帯の水田—南部九州—』『考古学ジャーナル』518号、ニュー・サイエンス社
- 7 下甑村教育委員会1974『大原・宮脇遺跡』1974下甑村教育委員会発掘調査報告書（1）
- 8 中沢道彦・野野原2003『レプリカ法による鹿児島県末吉町上中段遺跡出土土器の観察』『鹿児島考古』第37号、鹿

児島県考古学会

- 9 広瀬と雄2007『弥生時代はどう変わるか』学生社
- 10 河口貞徳・出口浩1972『第一次花熱帯遺跡発掘調査報告』『鹿児島考古』第5号、鹿児島県考古学会

(富山孝一)

第5節 上水流遺跡の中世・近世の出土遺物について

上水流遺跡から出土した中世・近世の遺物は種類が多く特徴的な遺物が多い。ここでは、それらの全てについて述べることは不可能であるが、特徴的な資料について取りあげ、遺跡の特徴を浮き彫りにしたい。

本遺跡からは多くの輸入陶磁器が出土している。ここでは、おおまかな流れを示したい。

万之瀬川の中世遺跡として著名な持鉢松遺跡はD期（13世紀前半）が主力であるが（第214図・第216図）。本遺跡はC期・D期が少数でE期（13世紀中頃）以降が主力となり、特に陶磁器の量ではE・F期がメインとなる。F期の龍泉窯系青磁は、地方においては多い方である。G期（註1）も比較的多く、福建産の（泉州窯タイプ）粗製青磁碗・森田C類白磁・粗製白磁碗（無釉高台のもの）などのセット関係もみられる（註2）。

以下に時期ごとの様相をまとめる。

- C期：白磁皿IV・VI類（少数）
- D期：白磁碗VII類・皿III-1類、青磁同安窯・龍泉窯系碗I類（少数）
- E期：青磁龍泉窯系碗IIb・IIa、陶器I・III類、鉢VI・I-2類（施釉）
- F期：青磁龍泉窯系碗III類・坏I-1a、白磁IX-1・2類碗・皿
- G期：白磁森田C類、青磁泉州タイプ・IV類大碗・小碗・皿
- H期（15世紀）：白磁森田D類、青磁上田II類・BII・CII・DII・EII（倣龍泉系青磁【土龍泉】）・倣建窯天目茶碗
- 16世紀：青磁上田III・IV類、白磁森田E類、青花景德鎮及び漳州窑碗・皿（朝鮮産陶器？）

※ 他に白磁壺III類がC～F期のいずれかの時期のものである。

17世紀（16世紀末～18世紀初頭含む）：徳化窯系白磁

次に、国産のものをみてみたい。それらは、在地土器・東播磨系須恵器口鉢（以下、東播系鉢）・備前の播鉢（15・16世紀）・備前の大甕・備前を模した在地の瓦質土器播鉢・瓦質土器羽釜・フライパン形土器（焙烙・炒り具）・初期薩摩焼（主は堂平窯産）・肥前系陶磁器（染付・陶器など）などがあり、多種多様である。

東播系鉢については、兵庫県の神出（神戸市）および魚住（明石市）の窯跡出土資料と実際に比較したところ、形態は13世紀代のものとほぼ同じであるが、粘土と釉薬

のかかり具合が全く異なるもので、神出・魚住のどちらのものでもないことが明らかになった。また、同様に甕についても同様にタタキとナデが全く異なることが明らかになった。この事実によって、本遺跡出土の東播系とされるものは產地不明であり、広義の「東播系」であるものの厳密な「東播磨産」ではないことがほぼ明らかとなつた。今後、県内各地のものや西播磨・北播磨のものなどについても実見を行って再検討する必要があつる。

仏器も出土している。上田耕氏によれば、仏器は1999年の時点で県内では少なくとも9箇所以上の遺跡から出土しており、そのいずれもが寺院・城館もしくは墓地からのものであるという（上田1999）。上田氏による集成後にも寿国寺（鹿児島市）などの出土例がみられる。この事実から、仏器が出土するというのは、遺跡が寺院に関連する可能性が高いことを示すということにならう。

ベトナム産の焼締長銅壺（瓶）も出土した。ベトナム中部「ミースエン・フックティク産」のものである。もともとは、何らかの容器として輸入されたものであるが、その後茶道具の一つとして国内で再利用されたものである（註3）。

金属製品の出土も目立つた。刃物のほかに、穿孔を有する短形鉄製品も出土した。この短形製品は、刃物などの明確な利器とは考えにくいものである。可能性のひとつとしては、原料鉄があげられるが（註4）。今後成分分析などの科学分析等を行い明らかにしていく必要があつる。

茶臼・白をはじめとして、石鉢、石塔（五輪塔か）の空風輪、石製紡錘車、石製硯、滑石製品（石鍋および石鍋転用品・縦耳と横耳の両方あり）などの石製品が出土した。この中で石臼については表31にまとめた。県内では現在のところ25遺跡で出土していることが確認された。多くは城跡であるが、中世後半には一般集落の調査例が少ないので注意が必要である。

遺構内出土遺物の割合については第207図に示した。中世と近世の遺物の他に弥生・古墳時代の遺物が以外に多いことが理解される。

中世については、青磁・白磁・輸入陶器などの輸入陶磁器の割合が三分の一を占める。次に土器の割合が四分の一程度である。青花は中世後半から近世初頭のものであるが、ここでは便宜上中世に含んだ。中世の中での割合は多くはないが、数は250点と多く出土している。

青磁はD期（12世紀後半～）からみられる。最も多いのは日期（15世紀）以降のもので四分の一を占める。

白磁は各時期のものが少量ずつ出土している。強いていうならば、器種としては皿が多い。

輸入陶器は華南産とみられる中世後半の時期のものが多い。ただし、華南産といわれるものは中世前半のもの

と区別がつきにくいものもあるので、混同してしまった可能性もある。

国产陶器については須恵器としたものが最も多い。特徴がないため、產地も不明であるが、櫛万丈や未詳須恵器などとしたものも含まれる可能性がある。

他是備前焼・東播磨系須恵器なども割合としては多い。

近世は半分が薩摩焼であるが、肥前焼も多い。その中で染付は最も多い。

[註]

- 1 G期に属するこれらは沖縄・東南アジアに多いものである。日期まで下る可能性も若干含む。
- 2 山本信夫氏（早稲田大学准教授）の御教示による。アルファベットのついた時期区分も彼による太宰府分類のものである。なお、泉州窓タイプについては亀井明徳氏と手塚直樹氏が指摘するものとある。
- 3 森村健一氏（大阪府堺市教育委員会）の御教示による。
- 4 桃崎祐輔氏（福岡大学准教授）の御教示による。

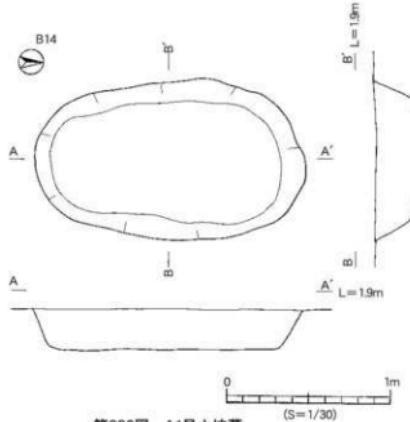
参考文献

- 新田栄治1997「知覧・鹿玉姫神社所蔵のクリスと薩摩の東南アジア貿易」「ミュージアム知覧紀要」第3号
上田耕1999「各県の出土仏具 鹿児島県」「考古学論究」第5号（特集 出土仏具の世界） 立正大学考古学会

（上床 真）

表31 鹿児島県内出土の石臼

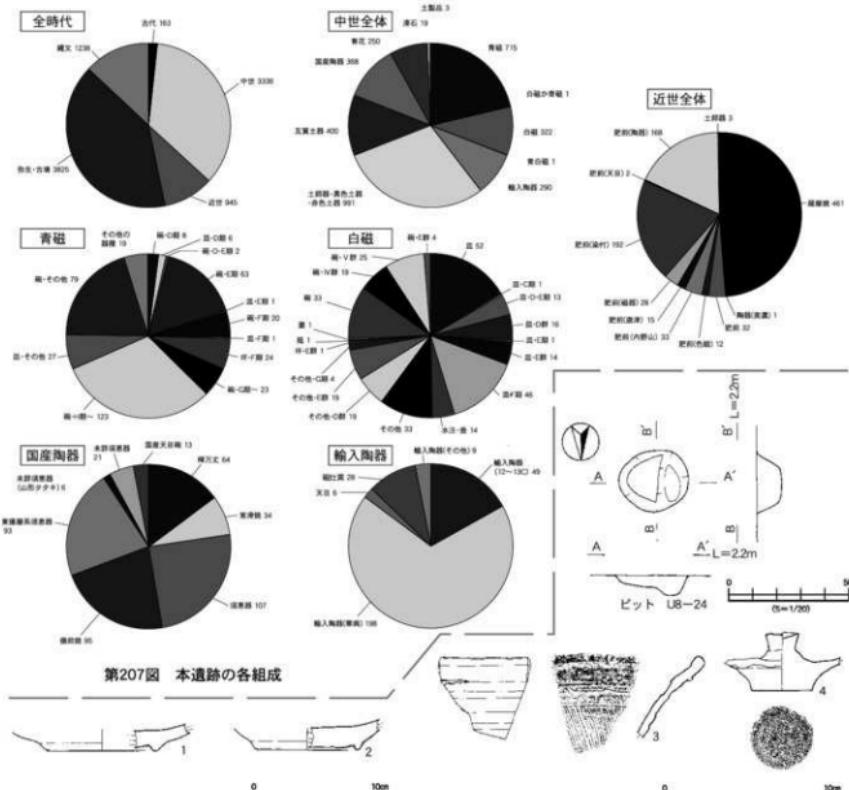
No.	遺跡名	所在地	備考
1	加賀原山	鹿児島市上町	万円通鑑・羽林出土
2	鹿島A	大口市川山出土水槽	カマド通鑑・羽林出土
3	下伊勢城跡	奈良吉田郡下伊勢	
4	森	近石町笠置森	道元記
5	日輪城（佐吉城）跡	鹿児島市川内町佐吉字屋蘭	青面叢集・庄内の乱の頃か
6	大龍頭城跡	鹿児島市大龍頭町ほか	
7	谷山城跡	鹿児島市上福元町本城	佐吉・葉室・9から出土
8	川上城跡	鹿児島市川上町元水槽	
9	猪母野城跡	鹿児島市小川町	
10	平山城跡（川辺城跡）	鹿児島市川辺町平山	
11	知覧城跡	鹿児島市知覧町本郷裏町内	
12	高木城跡	鹿児島市加世田町高木城ノ山	石臼難波岩切割・石鋸
13	猪ノ上	鹿児島市加世田町猪ノ上	石臼・火鉢骨石製品
14	牟礼・城跡	鹿児島市牟礼町牟礼向江	二輪底座周囲・ホタル13(1406) 年落城
15	牛平城跡	鹿児島市牛平町牛平	石臼（鹿島製）
16	足之城跡	いさき町本野・足之城字之城	小型の石臼（赤白か？）鹿島20
17	鶴ヶ岡城跡	鹿児島市赤穂郡鶴ケ岡三丁目	砂岩製石臼・ピット内から発見
18	松尾城跡・忍辱寺跡	さつき町虎伏山松尾	
19	平泉城跡	大口市川平山平水学城	
20	鹿島A	大口市川山出土水槽	
21	城山川直瀬跡	鹿児島市川山川上川直瀬	
22	御城城跡	鹿児島市御城町本ノ字御城山	石臼か？安山岩削・口縁部のみ
23	建昌城跡	姶良町建昌町建昌城	石臼周囲
24	高山城跡（高山跡）	肝付町高山字高山	高山の下部の受け部分
25	上水道	（本報告）	



第206図 14号土坑墓

表32 土坑墓一覧

No.	グリッド	遺構番号	計測値(cm)	備考
			長径 短径 深さ	
B1	A-5	394	64 50 22	
B2	B-4	65	176 84 14	
B3	C-6	-	90 10 -	
B4	D-5	土坑墓5号	90 80 190	積基か
B5	E-2	土坑墓6号	187 104 30	
B6	F-3	積基	130 100 199	積基か
B7	F-3	積基1号	98 90 72	積基か
B8	G-7	-	268	
B9	H-3	土坑墓(積基)4号	95 83 104	積基か
B10	H-6	-	616	118 86 16
B11	K-8	-	2108	154 94 44
B12	K-9	-	2883	214 138 10
B13	M-9	-	2895	56 44 -
B14	M-9	-	2893	168 96 25
B15①	M-9	3110-1	160 84 42	B15②と切合
B15②	M-9	3110-2	166 - 32	B15①と切合
B16	N-8	-	1197	84 80 60
B17	O-7	-	1038	162 90 40
B18	O-9	-	1323	160 88 49



第207図 本遺跡の各組成

第208図 各遺構出土の重要遺構・遺物

第6節 炉状遺構に関する若干の考察

(1) 本遺跡の炉状遺構の特徴

調査で検出された炉状遺構は23基であった。本節では現在までに鹿児島県内で報告されている主な類例と比較・検討しながら炉状遺構の用途や調査法について考察を行っていきたい。

本遺跡の炉状遺構で挙げられる特徴は以下の通りである。

- ① 使用年代がはつきり限定できない。検出層位と遺構内遺物より考えると、概ね中世～近世前半の可能性が高い。
- ② 建物内に配置された痕跡がない
- ③ 連続で並んでいるものがない
- ④ 数基が比較的集中しているグリッドがある。(O・P-6区, I-7・8区)
- ⑤ 燃焼部に付随するとみられる煙道については、はつきり確認できるもの、それと思われる形状を呈しているもの、確認できないものとがある。
- ⑥ 削平または崩落により燃焼部の上部が残っているものがなく、上部構造をうかがうことができない。
- ⑦ 炉壁構成は粘土のみで作られてるもの、礫で形作られ粘土で目地されているもの、焚き口に袖石を使っているものなどが見られる。

炉壁に使用する礫は特定の種類のものが使われるのでなく、適当な大きさで耐熱性のあるものを周辺から探してきて利用しているようである。軽石などを多用している類例も他の遺跡では見られる。

炉壁の形状は12・18・19号炉状遺構を除き、その形状はC字(あるいはU字)形の燃焼部とそれに続く掘き出し部の掘り込みが一連の構造となっており鍵穴形を呈するものである。

燃焼部の床面は被熱により赤色硬化しているものが見られたが、粘土等を貼たったのはなかった。また燃焼部の上部構造は、トンネル状の部分が崩落したり、削平されて消失した状態で検出されるものが殆どであるため、形状を知ることは困難であるが、比較的残存状況のよい一部の遺構の断面図で明らかのように、炉壁はわずかに内湾しながらたちあがっている。さらにその上部の形状については、上加世田遺跡のカマド跡2号と同じような形状をしていると考えられる。鍛冶炉の可能性が考えられる12・19号炉状遺構のような円形を呈する遺構の類例は数は多くないが金丸城跡の焼土を伴う土坑19号と類似しているといえよう。また同じ場所で切り合う形で検出されたものとして3-1・3-2号、7-1・7-2号、16-1・16-2・16-3号が挙げられる。これは炉状遺構を設置するのに都合のよい場所であるからと考えられる。このなかで3-1号と3-2号が炉状遺構は近世の大溝遺構の底面に作ら

れいる。炉壁は礫をC字形に並べて組んでおり、なおかつ隙間を粘土で目地を充填しており、検出した23基の中で一番ていねいな作りである。これは長期の使用を考えるものであり、一過性の短期廃絶型の施設ではないことを窺わせる。同様に一力所に切り合うかたちで検出された類例としては、金丸城跡(大崎町)の焼土を伴う土坑4号や上ノ城遺跡(南さつま市)の7号炉8号炉等がある。

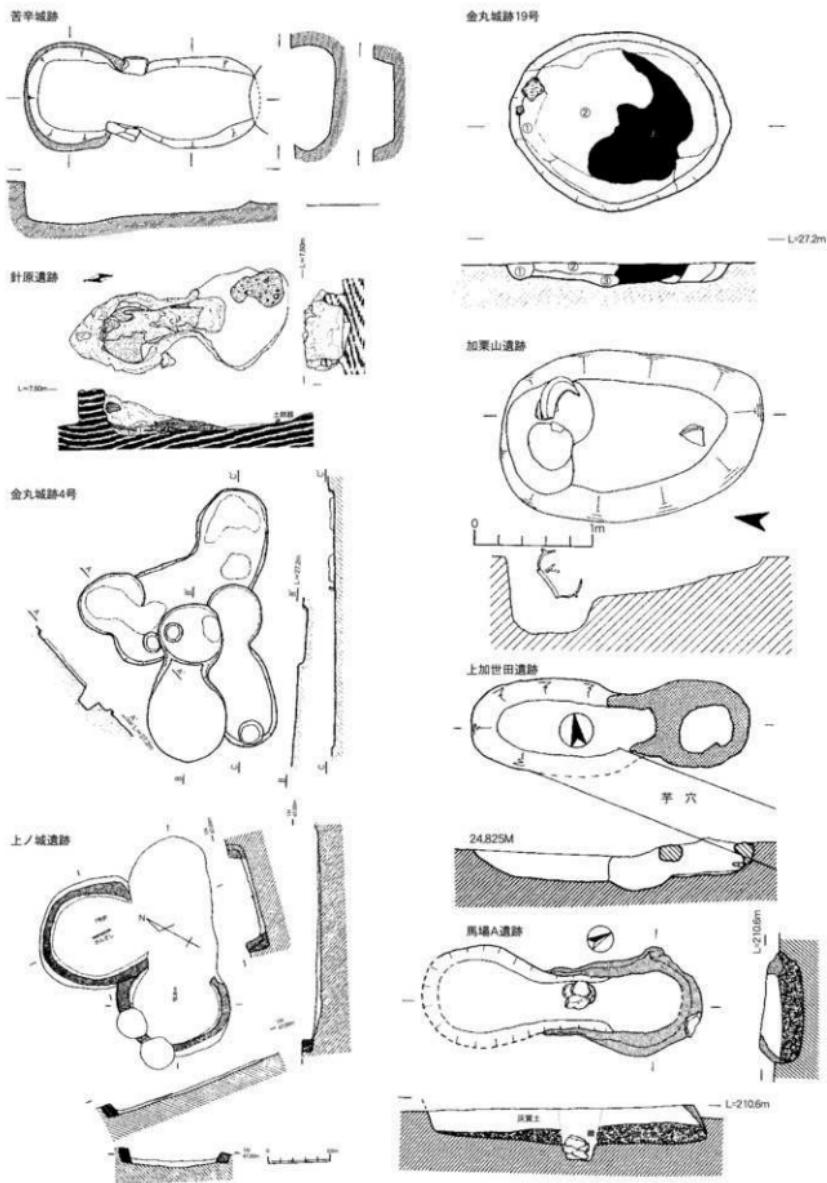
全国的にこのような礫を組んで燃焼部を作ったものは16世紀以降の城郭や都市部によくみられるという(合田2002)。本遺跡では、この溝状遺構内から18世紀のある時期(おそらくは前半)以降の陶磁器は出土していない。つまり、利用されなくなり埋まり始めたのではないかと考えられる。このことが3-1号炉状遺構と3-2号炉状遺構の使用時期を考えるうえでおおきな手がかりになるといえよう。

(2) 県内の炉状遺構の出土例

鹿児島県内で検出された炉状遺構の立地傾向を見ると、中世山城の郭内からのものが目立つようである。ただし、これはこれまでの鹿児島県の中世(特に中世後半期)の調査が城郭に集中する傾向をそのまま反映している可能性がある。

鍛冶炉・炉状遺構として報告されているものとしては主なものに日輪城跡5基(曾於市)、松尾城・宋功寺跡8基(さつま町)、上加世田遺跡5基(南さつま市)、持林松遺跡1基(南さつま市)、下山田Ⅲ遺跡2基(笠利町)等がある。このほかに、明確な機能を表す遺物等が出土せず、漠然と竈や炉として報告されているものに主なものに西ノ平遺跡3基(薩摩川内市)、上ノ城遺跡8基(南さつま市)、馬場A・辻町遺跡3基(大口市)、横川城3基(霧島市)、谷山弓場城跡4基(鹿児島市)、一宇治城跡1基(日置市)、松尾城跡1基(出水市)、加栗山遺跡・川上城跡4基(鹿児島市)、平泉城跡11基(大口市)、苦辛城跡1基(鹿児島市)、金丸城跡19基(大崎町)、雪山遺跡(日置市)などがある。

この他にも未報告であるが、向椿城跡(日置市)で33基程度、椿城跡(いきち串木野市)で27基程度の炉状遺構が検出されている。これらは、中世の山城に付随する遺構である可能性が考えられる。このような中で、本遺跡のように河川沿いの遺跡で23基の炉状遺構が確認されたことはこれまでにないことである。このことはこれまでの城郭での立地を中心に据えた研究から一步さらに広げて、中世～近世の平野部や集落での使用も併せて考えいかなければならないことを意味する。同じく未報告であるが、本遺跡より約1km下流に位置する芽原遺跡でも20基以上の炉状遺構が出土している。この中には中世の製鉄・鍛冶工房の中の施設と考えられる遺構も確認されている。また、本遺跡の東側に隣接する針原遺跡でも



第209図 各遺跡の炉状遺構

2トレンチ内で17世紀代とされる炉状遺構1基が報告されている。形状はC字(あるいはU字)形の燃焼部とそれに続く掘き出し部の掘り込みが一連の構造となっており上面観が鍵穴形を呈するもので本遺跡で一番多いタイプとほぼ同じである。

(3) 中世絵巻物資料に見られる竈の使用目的と設置場所
本遺跡の炉状遺構の使用目的について考察していきたい。中世の絵巻物資料(註1)の中に見られる民衆が日常生活で使用する竈は五種も含めて殆どが上に釜や羽釜が据えられているようである(註2)。その使用目的は、

I 煮る、炊く

II 煎る、蒸す

III 生活に使う湯の供給

IV 蒸風呂への湯気供給

V 風呂への湯の供給

等が主なものであり、その設置場所は

a 土間

b 釜屋(母屋の周囲にある竈が置かれている簡素な建物)

c 竈部屋(母屋にある板敷きの部屋)

d 湯殿の外側簡素な屋根付きの場所

等で殆どが建物内である。

これより見ると竈は民衆の生活空間に密着しており、なつかしく雨に濡れて熱効率が下がる場所を避けて設置されているようである。

本遺跡は、溝状遺構・大型土坑・不定形土坑など、様々な礫や鉄滓・輪の羽口を伴う遺構が存在するが、これらの中に鉄滓は陶磁器片と同じ様に投棄されたようであり、製鉄炉や鍛冶炉あるいは工房とはっきり想定される遺構は確認されていない。しかし、平成7年に金峰町(現南さつま市)が行った本遺跡の埋蔵文化財確認調査では7トレンチから17世紀から18世紀初頭にかけて操業していたと考えられる溶解炉が確認されている(註3)。また、製鉄操業に伴う廃棄物が投棄されたと考えられる集石遺構も隣接して検出されている。このことから、本遺跡の炉状遺構の性格は、

A 製鉄や鍛冶に伴う施設

B 上記の絵巻物の中に見られるような目的で作られた施設

C その他の目的で作られた施設

の三つが考えられる。特徴として全て建物の中でなく屋外に作られていることが挙げられよう(ただし、炉状遺構周辺の建物跡が調査中に認識できなかった可能性は排除できない)。建物との距離は2~3mと近いもの(16-1、16-2号炉状遺構)から、周囲に建物のない場所に設置されているもの(4号炉状遺構、7-2号炉状遺構)がある。

ただし、これらの炉状遺構と建物が同時代のものであつ

たかは不明である。

このほか短期間の使用で廃絶した印象を持つ炉状遺構もあれば、前述したように3-1、3-2号炉状遺構のように大溝の底面に長期の使用を考えていいねに作られていると考えられるものもある。しかしながら一般的には水分や温湿度が適りやすいところである。このような場所で使うと、燃焼部内の温度が上がり、水蒸気爆発等がおこる危険性もある。このような条件の悪いところになぜ長期使用を考えた竈を作る必要があったのかという疑問も残る。これらのことについては、同様の出土状況にある類例の増加を待ちたいところである。

(4) 炉状遺構の調査手順の再確認

最後に本遺跡の調査方法で反省点とすべきことを挙げていきたい。いずれの炉状遺構も周辺に鉄滓等が出土しなかったため、製鉄や鍛冶に関する遺構を調査する際に行う、磁気探査や鍛造剝片・粒状滓の存在の確認を磁石等を使わずに肉眼のみで確認したことである。これらのことを見えて、炉状遺構の調査で必要な事項を今一度確認して、今後の調査の参考としたい。

ア 検出時における周囲の地形の確認。

イ 燃焼部や掘き出し部内より出土した炭化物のサンプリング→年代測定

ウ 鍛造剝片・粒状滓の確認 肉眼分類→ふるい・磁石・特殊金属探知器等の使用

エ メッシュを切っての周辺土壤の取り上げ→水洗い・選別等

オ 焼土城の遺構周辺への扒がりの確認

カ 遺構内遺物の出土状況の確認

キ 周辺に建物跡等の遺構があるかの確認

ク 調査区周辺に集落又は製鉄や鍛冶に伴う施設があつたかの検討

[註]

1 本稿で使用する『墓縮絵圖』は1351年成立。『一遍絵圖』は1331年頃成立。『信貴山縁起』は1180年頃成立。『春日権現記』は1309年頃成立した史料である。

2 加賀山遺跡の竈址は炉内より湯釜が出土している。

3 遺構内遺物として焼鐵、鉄滓、羽口、スサミジリの粘土塊、カーボン等がある。

【引用・参考文献】

稲田孝司1978「忌の竈と王權」『考古学研究』25-1 考古学研究会

大崎町教育委員会2005『金丸跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

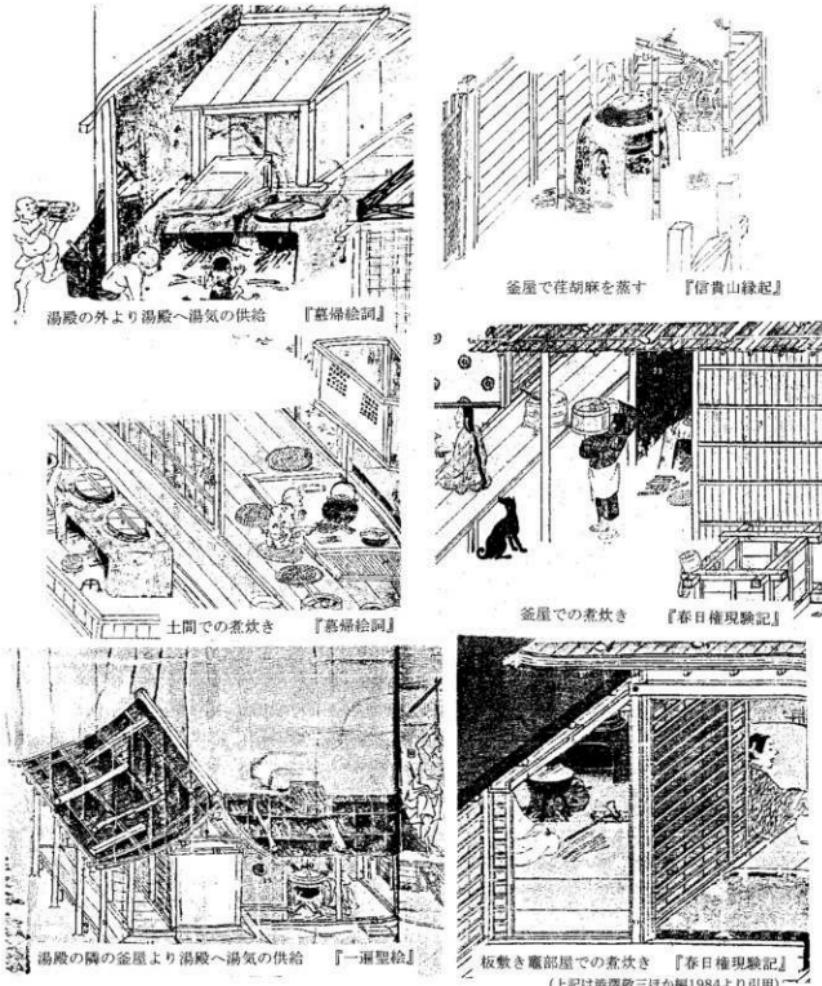
大崎町教育委員会・(財)元興寺文化財研究所2000『日輪城(恒古城)跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(20)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『雪川遺跡・猪引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)

加世田市教育委員会1981『上・加世田遺跡』(第1地点・第2地点)『上・加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

金峰町教育委員会1998『上水流遺跡(第1次調査)』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

金峰町教育委員会2003『船支遺跡・弥十山遺跡・針原遺跡・



第210図 絵巻にみる炉状遺構

上水流C・D遺跡・大迫田遺跡 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 (14)

合田幸美2002「大阪城跡の竈跡について」『大阪城跡発掘調査報告Ⅰ』(財)大阪府文化財センター発掘調査報告 第78集

森澤敬三・神奈川大学日本民俗文化研究所編198

名古屋市博物館2003「台所の考古学 食をめぐる知恵の歴史」

名古屋市博物館特別展示図録

(抜木茂樹)

第7節 上水流遺跡出土の薩摩焼について

(1)はじめに

薩摩焼は、のちに「焼物戦争・茶碗戦争」とも呼ばれた豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役：1592～1598年）の際、島津義弘が連れ帰った朝鮮人陶工により始まる。鹿児島に上陸した朝鮮人陶工は、串木野に串木野窯（いちき串木野市下名）、船佐に宇都窯（姶良町船佐鎌倉字宇都）、加治木に御里窯（加治木町仮屋町）などを開窯し、薩摩藩の庇護を受けるなどしながら陶器を生産した。朝鮮人陶工等により伝えられた製陶技術は、現在でも苗代川地域（現日置市東市来町美山）や龍門地域（加治木町小山田）などで受け継がれている。

上水流遺跡出土の薩摩焼には、その製陶技術、灰褐色系や赤褐色系の色調で緻密な胎土、褐色系に発色する鉄釉や緑褐色系に発色する灰釉を掛けている釉の特徴から、堂平窯で生産されたと考えられるものが含まれる。これらは、本文中において器種ごとにその特徴の説明を行つたが、ここでは出土した薩摩焼について、堂平窯跡報告書（埋文センター2006）を基に、時期や器種等について再度検討を加えていきたい。時期については、堂平窯跡報告書に基づき下記の通りとする。

I期（17世紀前半）

Ia期（1620～1630年代）

Ib期（1630～1650年代）

II期（17世紀後半）

(2)各器種について

壺

大溝31・32は、Ia期のものである。口縁部は、先端を外側に折り、さらに内側に折り返して肥厚させ丸くおさめ、「T」字状の形状をつくる。口唇部は、内側を高くし外側を溝線状にするものである。器壁は極めて薄い。朝鮮の製陶技術が色濃いものである。

大溝33～38は、IbからII期への過渡期のものであると考えられる。口縁部は、先端を外側に折り、さらに内側に折り返して肥厚せ丸くおさめ、「T」字状の形状をつくる。口唇部は、内側を高くし外側を溝線状にするものである。内面にタタキ成形による同心円状のあて具痕が残る。器壁はIa期のものよりやや厚い。

壺

大溝64は、Ia期のものである。内面にタタキ成形による同心円状のあて具痕が残り、器壁は極めて薄い。釉をはじいているところがある。

大溝62・63・66・67は、II期のものである。口縁部を外側に折りさらに内側に折り返して肥厚させたち端部を丸くおさめるものと、口縁部を内側に折り返して丸くおさめ口唇部に蓋受け部を有するものがある。内面に

は、タタキ成形による同心円状のあて具痕がのこる。口唇部に貝目が残るものがある。器壁はI期より厚くなる。

大溝61・68は、II期のものである。内面にタタキ成形による同心円状のあて具痕が残り、器壁はI期より厚くなる。

底部

要あるいは壺と思われるもので、大溝49～57・大溝59・大型土坑17・81・溝12・47はII期のものである。内面にタタキ成形によるあて具痕が残り、外底面に貝目が残るものが多い。器壁はI期より厚くなっている。

片口

大溝70・71・73・74・大型土坑18は、II期のものである。タタキ成形でつくられており、内面に同心円状のあて具痕が残る。口縁部は端部で外側に折り、さらに内側に折り返して丸くおさめる。

水注

大溝69は、II期のものである。注口は巻口で、注口に向かって左側の端が上になるように巻かれている。

擂鉢

大溝85～91・溝48は、II期のものである。器形として「逆ハ」の字にひらき、口縁部は外側に折り返して肥厚させ、2・3条の突帯をつくる。口唇部が幅広く平坦なものと、口縁部が外反するものがある。

蓋

大溝75～78・大型土坑70・土坑8・溝9は、II期のものである。器形は浅鉢形のもの、平坦な円盤状のもの、円盤状の体部の下面に輪状の粘土紐を貼り付け身受け部をつくるものがある。浅鉢形のものは、口縁部を外反させ、さらに内側に折り返して肥厚させ、内側を丸くおさめている。平坦な円盤状のもの・円盤状で見受け部をもつものは、端部をヘラ状工具でケズリ調整した痕が残る。

德利

大溝79～81・大型土坑83～85は、II期のものである。タタキ成形しており、内面には同心円状のあて具痕が残る。「舟德利」型と呼ばれる胴部下半部に最大径を有する形状を呈するものと、「鶴首」型と呼ばれる頭部が細長く肩部がなで肩の形のものがある。頭部内面あるいは外面上に、胴部と接合した痕が残る。

サヤ鉢

大溝82は、II期のものである。内底面に砂目と胎土が残り、外底面には貝目が残っている。また、口唇部に粘土と思われる目土が残り、外底面には貝目が残っている。

器種について

上水流遺跡の包含層や大溝などの遺構から出土した堂平窯製の土器（器種が分かるもの）は、表33のとおりである。壺・壺・擂鉢などの日用品が多い。特筆されるとして、数は極めて少ないが、II期と考えられる薩摩で「白薩摩」と呼ばれる一般的に上手の碗・德利が出土

している。また、I期としているが器壁が極めて薄く口縁部の作りがシャープなものの中には、串木野窯あるいは朝鮮製の可能性のあるものもあり、今後検討の余地がある。

器種の用途別に見てみると、甕・壺・徳利などの貯蔵・運搬具が多く、次いで、擂鉢のような調理具、片口・水注・碗の食膳具となっている。また、皿や碗などを中に入れて焼くときに使うサヤ鉢も1点出土している。これらのことから、17世紀から堂平窯との交易・交流があり、堂平窯製の薩摩焼が上水流遺跡のある南薩方面に流通していたことを示している。17世紀は「鹿児島県地域にとって特に在地の製品といえる薩摩焼が増加していく」という、九州島内における、より限定した範囲（薩摩藩内とその規模の視点で見た場合）での、出土陶磁の在地産化が進み始める時期でもあるとも言える。」（橋口2002）としていることとも一致している。

（3）まとめ

堂平窯のあった日置市東市来町美山は、上水流遺跡のある南さつま市金峰町花瀬のほぼ真北に位置し、陸路での直線距離にして約25kmである。江戸時代には美山から南薩への街道として、美山から宮田・海辺の神之川を経由して、海岸沿いに日置・吉利・金峰と陸路があった。また、美山の近くを流れる神之川の河口から上水流遺跡の前を流れる万之瀬川の河口までは、海路での直線距離にして約20kmである。神之川の河口にある神之川港は、島津義弘が朝鮮出兵した文禄の役・慶長の役のとき、食料・武器などを運び出した港もある。このように、堂平窯のあった美山と上水流遺跡のある南さつま市金峰町花瀬とは、近距離であり、ともに海・河川の交通の利便性がよいことが、両者の交易・交流（堂平窯製薩摩焼の流通）に影響しているのではないかと考えられる。また、

（溝口学）

両遺跡が近距離であることや海・河川の交通の利便性を背景とした交易を想定すると、上水流遺跡をはじめとする万之瀬川流域や近隣の地域には、堂平窯製薩摩焼が多く流通しているのではないかと考えられ、今後検討していく余地がある。

このように上水流遺跡には、17世紀代に美山の堂平窯の製品を用いるなどして、人々が生活を営んでいたことが分かる。

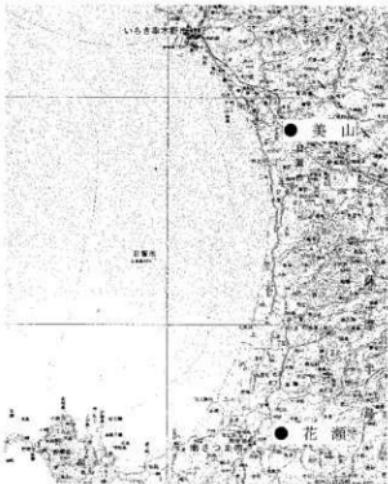
【引用・参考文献】

- 東市来町誌編纂委員会2005『東市来町誌』
鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『堂平窯跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『青山遺跡・猿引遺跡』
加治木町教育委員会1994『山元古窯跡』
姶良町教育委員会1994『元立窯跡』
加治木町教育委員会2003『野里窯跡』
鹿児島県教育委員会1978『野野(冷水)窯跡』
橋口 亘2006『再録 鹿児島県地域における16~19世紀の陶磁器の出土様相—鹿児島県地域の近世陶磁器流通—』『南日本文化財研究』No.2 南日本文化財研究刊行会

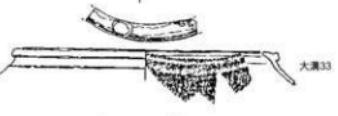
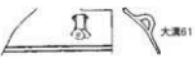
表33 本遺跡出土の薩摩焼の出土傾向

器種	大溝	大型土坑	土坑	集石	溝	計	割合(%)
甕	51	2	—	4	49	106	23.3
壺	11	—	—	—	—	11	2.4
甕壺底部	12	1	—	—	—	13	2.9
徳利	35	3	—	—	—	38	8.4
擂鉢	13	1	—	—	1	15	3.3
片口	8	1	1	—	—	10	2.2
水注	1	—	—	—	—	1	0.2
碗	—	1	—	—	3	4	0.9
蓋	12	1	1	—	1	15	3.3
土瓶	1	—	—	—	—	1	0.2
サヤ鉢	1	—	—	—	—	1	0.2
その他	55	61	11	11	101	239	52.7
						454	100

※ 器種が分かるもの（接合したもの・陶器片）を、一つとして数えている。

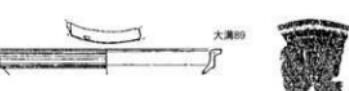


第211図 花瀬・美山の位置図
(1/200,000の地図を50%に縮小したもの)

時期 期種	I期（17世紀前半）		II期（17世紀後半）
	Ia期（1620～1630年代）	Ib期（1630～1650年代）	
甕	 	    	
壺			   

※スケールは不統一につき
本文中掲図参照のこと

第212図 本遺跡出土の薩摩焼の分類①

時期 期種	I期（17世紀前半）	II期（17世紀後半）
片口		 <p>大溝70</p>
縹鉢		 <p>大溝71</p> <p>大溝73</p>
		 <p>大溝85</p> <p>大溝89</p>
蓋		 <p>大溝76</p> <p>大型土坑70</p>
		 <p>大溝75</p> <p>大型土坑8</p>
徳利		 <p>大溝79</p>
		 <p>大溝81</p>
サヤ鉢		 <p>大溝80</p>
水注	<p>※スケールは不統一につき 本文中挿図参照のこと</p>	 <p>大溝89</p>
		 <p>大溝82</p>

第213図 本遺跡出土の薩摩焼の分類②

第8節 上水流遺跡出土のモモを中心とする種子炭化物

(1)はじめに

上水流遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡や、中近世の炉状構・土坑墓から、モモの果実の中にある堅い核が出土している。これは、一般には「モモのタネ」と呼ばれる。ただし、この堅い部分は、種子を包んでいる果実の最も内側の皮にあたるところで、これを内果皮という。厳密な意味での「種子」である「胚乳」は内果皮の中にある。アーモンド形をしている。これを「仁（じん）」と呼ぶ。モモの「仁」は、乾燥させて解熱・婦人病薬として煎服し、杏仁の代用品ともなる漢方薬である。ここでは、遺跡から発見されるモモの核のことを「桃核」として論を進める。

太田三喜によれば、現在の日本人が食べているモモは、その大部分が明治8（1875）年に中国から移入された上海水蜜桃・天津水蜜桃などの系統のものであるといふ（太田1986）。つまり、遺跡で発見されるモモとは異なる系統のものである。

モモは、弥生時代以降に日本に広まったものとされているが、長崎県の伊木力遺跡では、日本最古である縄文時代前期の小柄なモモが見つかっている。古墳時代から古代については、祭祀が行われた場所で木簡や人形とともに出土する例、井戸の中から出土する例などがあるというが、これも地鎮など祭祀に関係する。モモは人の魂が宿るとか、魔除けになるなどと考えられ、古くから様々な伝承がある。モモの持つ力について述べられたものとしては、古事記や桃太郎の話が著名であろう。

和銅5（712）年に成立した「古事記」には、黄泉の国（冥界・あの世）へ妻の伊耶那美命（イザナミノミコト）に会いに行った伊耶那岐命（イザナギノミコト）が、黄泉の軍勢に追われて逃げ歸ってくる場面で、黄泉比良坂の麓に生えていたモモが登場する。そして、伊耶那岐命がモモの実を3つ採って投げつけるとモモの力によって追っ手はことごとく退散する。

桃太郎は、流れてきたモモを割ると中に桃太郎が入っているというものが有名であるが、オリジナルは、流れてきた桃を食べた老夫婦が若返って桃太郎を生んだというものである。

桃の原産国・中国では、古くから桃には不老長寿や魔よけの力があると信じられ、「仙果」「仙桃」の別名を持つ。「桃源郷」の伝説もモモに関するものである。

いずれも、モモが超常的な力（強い呪力・靈力）を持つと考えられていたという証拠となろう。また、この思想は日本独自のものではなく、中国からの借り物である。

(2) 遺跡でのありかた

県内では、筆者が確認した範囲では、13遺跡20箇所

で発見されていることが確認された。詳細は表34に示した。基本的には、東和幸氏の集成（東2000）を参考としたが、これに中原一成氏の集成（中原2003）と、近年の新出資料を加えて作成した。

概説などでは、桃核は竪穴住居跡から出土する例が多いとされている（小清水1963など）。本県では4遺跡5箇所の竪穴住居内から出土している。他には、竪穴造構1・井戸2・炉状造構2・土坑墓1となっているので確かに割合としては竪穴住居内からの出土例が多いことになろう。ただし、井戸と土坑墓については祭祀的な側面が強いので、竪穴住居・炉状造構からの出土についても、造構の廻覆などに際する祭祀などの可能性も考慮すべきであろう。

なお、10号炉状造構中のものが、 $2.5 \times 1.6\text{cm}$ で厚さ1.2cm、17号土坑墓中のものが $2 \times 1.3\text{cm}$ で厚さ1cmである。10号炉状造構モモ核は通常サイズであるが、それ以外のものは17号土坑墓中のものとほぼ同サイズでありやや小ぶりである。これは本遺跡の特徴である可能性がある。

また、本遺跡では炉状造構内から桃核のほかにオオムギ・コムギの炭化物が発見されている。これらは食用の可能性が高いが、桃核については食料と祭祀の両面から検討が必要であろう。ところで、古代以降の遺跡からは、栽培植物とともに食用可能な他の植物遺体も出土することから、食料資源が「栽培」という方法でのみ成立するものでないことが明らかにされている（山田1995）。本県のモモの出土状況についても栽培か否かそれとも他の要因かについて検討すべきであろう。

【参考文献】

- 小清水卓二1963「古代日本の住居跡から出土する桃核について」『近畿考古論』 横原考古学研究所
寺沢知一・寺沢知子1981「弥生時代植物資料の基礎的研究」『奈良県立橿原考古学研究所紀要 考古学論』第5冊 奈良県立橿原考古学研究所
大田三喜1986「古代遺跡出土の桃核について」『考古学と自然科学』第19号 日本国文化財科学会
米田文孝1991「副葬品の種類と編年 その他自然遺物」『古墳時代の研究』8 雄山閣
山田昌久1995「日本における13～19世紀の気候変化と野生植物利用の関係」『植物史研究』3-1 植生史研究会
金原正明1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル』No.409 ニューサイエンス社
東和幸2000「東アジア先史時代植物遺存体集成：鹿児島」甲元寅之編『東亞中國海沿岸地域の先史文化』第3編 考古学研究成果報告書11
中原一成2003「鹿児島県における植物遺体の研究の現状」『九州・種々地域における植物種子の現状と課題』発表要旨集 熊本大学文学部考古学研究室・熊本大学理蔵文化財調査室
大山真充1994「桃」森浩一編 同志社大学考古学シリーズVI『考古学と信仰』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
奈良国立文化財研究所1995「平城京左京二条二坊・三条二坊（長屋王・藤原麻呂邸）発掘調査報告」奈良国立文化財研究所学報第54冊

（上床 真）



表34 発掘されたウメ・モモ等の核一覧

遺跡名	所在地	時代	縄属遺構・包含層	遺構	種類	数	備考	報告書・文献
1 朝原貝塚	鹿児島市椿原南原下	縄文後期か?	—	—	モモ	1	市埋文報 (4) 1999	
2 一瀬松山	鹿毛町一瀬松山町一瀬	縄文後期中葉	—	—	ヤマモモ	—	町埋文報 (1) 1981	
3 衛ノ瀬原 2・4地点	鹿島市衛東市衛町上市/瀬・瀬戸/口/瀬内	弥生中期	—	—	モモ	—	未報告	
4 上瀬原 2・7地点	鹿島市衛分上瀬原櫻木の森	弥生中期前半	住居跡	1号住居	モモ板	1	—/宮式・北様式	鹿島七 (52)
5 上瀬原 2・7地点	鹿島市衛分上瀬原櫻木の森	弥生中期中葉	住居跡	2号住居	モモ板	1	山ノ口・馬製・横吹式	鹿島七 (52)
6 機半札川	宿毛市十二前下垂	古墳 (復元)	住居跡床面	—	モモ板	2	復元	市埋文報 (12) 1993
7 大島	鹿屋市大島町大島西路町	弥生一世 (～近代?)	—	—	モモ板	2	完形と半形	鹿島七 (80) 2005
8 小瀬戸	姶良郡姶良町西瀬田	平安	井戸跡	井戸1	クメ種実	1	復原器・木器	町埋文報 (18)
9 小瀬戸	姶良郡姶良町西瀬田	平安	井戸跡	井戸1	モモ種実	3	復原器・木器	町埋文報 (19)
10 犬ヶ原	いちき串木野市市原町伊崎田犬ヶ原	平安	土坑(堅穴通構)	土坑1(堅穴通構)	モモ板	9	鹿島七 (50)	
11 畦村	鹿さつま市金峰町畠下字牛原	古代～中世	—	—	モモ板	2	町埋文報 (17) 2004	
12 仁田屋中田	鹿児島市石田町仁田屋中田	平安	配石炉	2号配石炉	モモ板	2	瓶形土器・土器群	鹿島七 (110) 2007
13 上水流	鹿さつま市金峰町花瀬	古墳 (復元)	住居跡	6号住居	モモ板	1	本報告	
14 上水流	鹿さつま市金峰町花瀬	中世後半～近世初期	伊狀遺構	10号伊狀遺構	モモ板	1	本報告	
15 上水流	鹿さつま市金峰町花瀬	中世後半～近世初期	住居跡	17号土坑墓	モモ板	1	古説	本報告
16 芝原	鹿さつま市金峰町宮崎	古代か	溝状遺構	イコウ1391	モモ板	1	未報告	
17 芝原	鹿さつま市金峰町宮崎	古墳 (古代)	—	—	モモ板	1	未報告	
18 芝原	鹿さつま市金峰町宮崎	古墳 (古代)	—	—	モモ板	1	未報告	
19 室園B	南九州市川辺町室園	弥生末～古墳初期 (中津洋)	住居跡	2号住居	モモ板	数個	床着ではない	今年度報告
20 下ノ原B	大口町下原	古墳	住居跡	—	モモ板	数個	床着ではない	未報告
21 丹根	東伏見町丹根岩川	古代か	—	—	モモ板	数個	未報告	
22 南下	鹿さつま市金峰町南下	古墳 (古代)	—	—	モモ板	数個	包含層	未報告

東和幸2000「東アジア先史時代植物遺存体集成：鹿児島」甲元真之編『鹿東中国海沿岸地域の先史文化』第3編 考古学研究成績報告書1 1
中原一成2003「鹿児島における植物遺体の現状」「九州・極東地域における植物種子の現状と課題」発表要旨集

* 初町住氏の鑑定・教示によると、観賞用の花木であるハナモモの可能性も考えられるという（指宿市教委）。

表35 発掘されたモイドン一覧

遺跡名	通称	所在地	備考	文献
松原遺跡	お由の森	南種子町基木 (導木小田)	宝満神社御新田 (赤木裁培地) の隣接地・小野重胡氏が御新田を「モイドン」とした。	小野重胡1970
津曲遺跡	津曲の森神社	肝属郡肝付町野崎津崎	平成16・17年鹿児島大・琉球大発掘	小野重胡1966
山外森遺跡	山外森のモイヤマ	鹿屋市上城川町山外森	鷲ったとの伝承あり	小野重胡1966
北麓遺跡	森山	鹿児島市・福元町北麓	かつて「森山」と呼ばれた伝承あり	出口2003『からら』No.15・市埋文報 (21)
森遺跡	森	始良町西森田森	地名から類推した	埋セラ文報 (55)
上水流遺跡	内野門のモイヤマド	鹿さつま市瀬戸瀬山・上水流	上水流遺跡・「森河跡」として記している。	宿毛市埋文報1957
芝原・渡畑遺跡	森山	鹿さつま市宮崎市芝原・渡畑	「森山」と呼ばれるところが「渡 (わたり)」の近く (渡畑付近) にあったという。	「阿多地区伝承文化」(金峰町・阿多地区公会館 編2000)
曉神	曉神	曾於市大隅町岩原旭ヶ丘	直接は奥田所。庭面を曉神遺跡として調査	町教委埋文報 (1)・(2)・(4)

表36 発掘された「塚」

遺跡名	所在地	備考	文献
放光寺	出水市高尾町下高尾野字放光寺	礎樋1基・築石基6基・土坑13基	県教委埋文報 (2)
山崎B	鹿児島市山崎	塚状遺構	県教委埋文報 (1.8)
東周場	曾於市大隅町岩原東周場	塚状遺構	大隅町埋文報 (3.2)
小篠	鹿さつま市曾於市小篠之名	石積みの塚	金峰町埋文報 (1.1)
川上ノ	鹿屋市大浦町字川上ノ	塚状遺構 (供養碑)・頂上に石碑 (墨書き)	県教委埋文報 (4.8)
南別府城跡	知覽町南別府字城山・穴口	塚の下に方形土坑1・長方形土坑2・墓石・対永通宝	知駒町埋文報 (4)・上田1995『ミュージアム知駒記』第1章
北方遺跡	さつま町中津川北方町	塚状遺構	健麿町埋文報 (4)
下伊集院	東吾妻町伊集院下伊集院	唐仁古墳群13号墳指定外7号墳の標注。中近世の像の可能性あり	県教委埋文報 (5.0)
因岡遺跡	鹿屋市川良町因岡	鹿屋市大木本筋防波堤調査。同時2号墳のとおり	
鍾石遺跡	志布志市志布志町鍾石	円形2基・対永通寶・塚状を呈する	

第9節 モイドンに関する考察

(1)はじめに

日本全国で「森山」とよばれるものがある。多くは、大樹が少し茂る林状の森が小山のようになったものであるが、既に森ではなくなっていることも少なくない。また、そこでは「森神」を祀っていることが多い。

この「森神」についてはこれまでの研究を要約すると、一叢の森のなかで祭る神。その森のなかの1本の樹を神木とすることが多い。モイドンとかモリサンと呼称されるのは森に敬称の殿や様をつけたからである。森神は森の木を切られたり、森を汚されたりすると強く祟る神として恐れられることが特徴で、森荒神という名もしばしば聞かれる。祖靈の祭場であるのが森で、祖神を祭るのが森神とされてきたし、また農耕神であるとも説かれてきたという。しかし近年になってそれらの通説に対する批判的な研究もできている。

ところで、上記の中の「モイドン」とよばれるものは鹿児島に存在する。県内各地において、「モイドンさあ」「モイサマ」「森山」「森神社」などと呼ばれているものは、そのほとんどがいわゆる「モイドン」である。この「モイドン」については、これまで小野重郎氏と下野敏見氏らが研究している。次節では両氏の研究成果について整理したい。

(2) 小野重郎氏と下野敏見氏の研究について

両者とも多くの論考があるが、ここではおおまかな問題だけあげる。まず、小野氏の研究からみていく。

小野氏は、モイドンを祖靈祭祀の場であったとして（小野1957ほか）、精力的に鹿児島県内各地のモイドンの資料を收集し、研究を進めていた。

指宿地方の調査成果によれば、「社もなく神体も見当らないもののが多く、「神体らしい石や祠が見当らない」もの。「近くにある木が神体ではないかと思われる」ものなども存在するという（小野1955）。また、神体または神体らしき自然石を地上に置くもの、石の祠・石祠に似た石碑、木造の社をもつもの、五輪塔の頭部を神体するものなども存在することが明らかになっている。

しかしながら、1982年になって「森神自体が祖靈祭祀の場ではない」という趣旨の批判的研究に影響されたのか、自説を撤回してしまう（小野1982）。この問題について整理した下野氏によれば、「モイドンの問題は振り出しに戻った」（下野2004）ということになる。

次に、下野氏の研究についてみていくことにする。下野氏は「モイドンには石塔や五輪塔片をしばしば伴うが、それは森の精靈をはじめ山野にみちている精靈を寄せ集めて祭り込めてあることを裏書きするものであろう」（下野1984・2004）としている。具体的には、①「開拓

伴う開拓地の諸靈供養の場」②「開拓によって追われた樹靈の鎮まる依り代であり、また供養の標識である樹木の存在する場」③「霜月の収穫後の門の講中の新嘗儀礼の場」という3要素によって成立した聖地とする（下野1984・2004）。また、モイドンを含めた「森山」の成立については、その地の開拓を行った「本家の創設時代であって、大方は近世に属し、古くても中世の中へ末頃のことであろう（下野1999・2004）」とした。

このように、現在のところ小野氏の調査成果については、先駆的なものがあることは間違いないが、こと研究の面では小野氏が自説を撤回したこともあるので、下野氏の方がまとまっているということになろう。上記の理由から、ここでは下野氏の説を支持することにしたい。

(3) 花瀬の森河神について

かつて、上水流跡内には「モイドン」があったとされている（指宿高校1957）。それは、「内野門のモイヤマドン」で別名「花瀬の森河神」（こちらで刻銘あり）であるが、現在まで2度遷座（移設）されている。

「モイドン新事例集」（指宿高校1957）によれば、「万之瀬川の土手のすぐ内側の田の中にあり、15坪ほどの砂地に、楓の木や蘇鉄などを植えて、その中央に木製トタン屋根の高さ60cmほどの家を作り、中には人頭大の砂岩が地上におかれ、白紙を被せて緒でくってある。このほか、この傍には、黒い祠型の60cmほどの高さの石碑があつて「森河神」ときざんである。又このあたりに木の根などには小五輪塔がばらばらになって少くとも6基分が散らばっている。」とある。確かに、筆者が平成12年度に上水流跡の調査に携わっていた頃には、上記の状況が残っていた。しかし、実はこの状況は過去に河川改修のために一度遷座された後のことらしい。

続けて引用すると、「大正の頃にはもっと川の上流の方にあった所にあり、この森山にはおぞろしい位に大きい木が」存在しているとあるが、筆者が地元の方々に聞き取りを行った結果によれば「上流」という部分は誤りで、実際はこの時点の場所よりも下流にあったことがわかっている。その場所は、まさに本遺跡であり、遺跡範囲の北側の字が「森山」であることからも、もともとの「モイドン」は今回の調査範囲の中に存在していた可能性が強い。

ところで、N-9・10区では、周溝とみられる溝状遺構を伴う「塚」状の遺構が発見されている。この塚状遺構の頂上付近には、T-1とT-2の2基の土坑があるが、性格不明である。実はこの「塚」状遺構が、かつて「モイドン」が存在したといわれる場所に近いことから、筆者はこの「塚」状遺構こそかつて「モイドン」だったものではないかと考える。これまで、「モイドン」についての発掘調査はあまり行われてこなかった。それは、

モイドンが「祟る」といわれていることによるものが大であろう。また、たまたま調査される場合が少ないのでかもしれない。表35に掲げたが、「モイドン」の調査を目的とした発掘調査はこれまでないようである。ただし、結果として「森山」「森」などの地名のつく遺跡や、「モイドン」とされる場所を調査していたことは若干みられる。

また、表36には、塚状遺構の発掘例についても挙げた。上水流遺跡の「塚」状遺構と「モイドン」との関係について類例を見るためである。類例を探すと、肝付町野崎の津曲の森神社などは、塚状の様相を呈している。また、「モイドン」とは若干異なるが、南種子町中之下真所の「森山（ガロー山）」も、一見すると古墳のようにも見えるものである。これをもって、上水流遺跡の「塚」状遺構が「モイドン」であるとは言い切れない部分もあるが、可能性は十分にあるのではないだろうか。

再び遷座について話を移すが、2度目の遷座は、河川改修によるもので、平成12年度の上水流遺跡の調査後の平成14年頃に行われた。筆者が平成16年の4月末に調査した時点では、既に現在の場所に遷座した後だった。現在は、祠と3基の五輪塔の一部（空風輪）が、セメントに半分埋められた状態で固定され祀られている。

ところで、五輪塔からは寺院や墓地との関係が想起される。周辺の寺院についても関係がありそうだ。『金峰町郷土史』によれば、花瀬には曹洞宗の「大年寺（花瀬字内田道・上之馬場）」と「皇徳寺（花瀬字今城原）」さらに、「今城」があったという（金峰町1987・1989）。

大年寺跡には、相州島津家三代（友久・運久・忠良）の石塔1基ずつと、代々住僧の無縫塔が22基残っている。なお、余談であるが、大年寺墓地のすぐ眼前には阿多用水路が流れている。

皇徳寺跡には、完全な形の逆修五輪塔1基と残欠数個がある。この寺は、南北朝の頃に後醍醐天皇の皇子懐良親王が5年間滞在されたと伝えられ、城館ではないが「今城」と呼ばれている。また、この場所には「男塚」「女塚」「諏訪神社（天和元年【1684年】再興の棟札あり）」も存在する。

この2つの寺院は、明らかでないがおそらくは中世中期～近世初頭に開基されたと考えられるので、下野氏がモイドンの創設期とした時期とも合致する。今後、寺院や集落などの関係も加味しながら上水流遺跡のモイドンについても検討する必要がある。

引用・参考文献

- 下野敏見1984「森山信仰の研究－モイドンとガローヤマの成立について」『鹿児島大学人文学科論集』第19号
下野敏見1999「日本の森山信仰の研究」『鹿児島純心女子大学国際言語文化研究』第5号
下野敏見2004「隼人の國の民俗誌I 田の神と森山の神」岩田書院

德丸亞木1999『森の信仰 一森や樹木にやどる神々』 尚古集成講座・講演集No.40 尚古集成館

德丸亞木2002『〔森神信奉〕の歴史民俗学的研究』東京堂出版 指宿高校郷土研究部1956『指宿地方のモイドンの調査』『薩

南民俗』8号 指宿高校郷土研究部
指宿高校郷土研究部1957『モイドン新事例集』『薩南民俗』10号 指宿高校郷土研究部

小野重朗1955『モイドン概説』『薩南民俗』10号 指宿高校郷土研究部

小野重朗1958『指宿神社の母胎 一モイドンをめぐって』『鹿児島民俗』19号

小野重朗1963『ガローとモリの二元性』『種子島民俗』16号 中種子高校地盤研究部

小野重朗1966『大隅のモイドン』『民俗研究』3号 鹿児島民俗学会

小野重朗1968『鹿児島のモイドン』『鹿児島県文化財調査報告書』13 鹿児島県教育委員会

小野重朗1970『森山の分布構造』『民俗研究』5号 鹿児島民俗学会

小野重朗1972『南九州の民俗神』南日本出版文化協会

小野重朗1982『奄美民俗文化の研究』法政大学出版社

小野重朗1992『南日本の民俗文化』第2巻神々と信仰 小野重朗著作集 第一書房

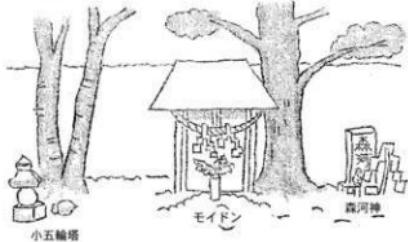
谷川健一編1995日本民俗文化資料集成第21巻『森の神の民俗誌』三一書房

福原敏男1996『森神信仰としての里神』『国立歴史民俗博物館研究報告』第69集 国立歴史民俗博物館

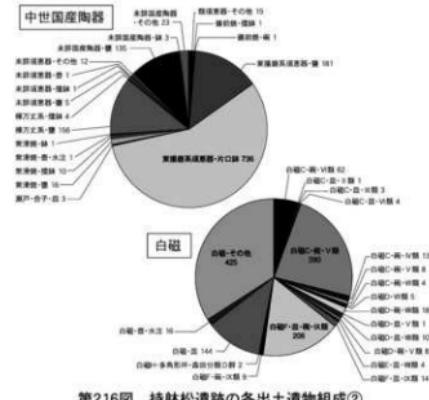
北園博1985『肝属東南部における祠堂』『大隅』第27号 大隅史談会

野田千尋1959『大隅平島高山町森神社のツナマキ祭り』『日本民俗学』第9号 日本民俗学会

金峰町郷土史編さん委員会1987・1989『金峰町郷土史』上・下巻



第215図 遷座前の内野門のモイドン（指宿高校1957より引用）



第216図 持林松遺跡の各出土遺物組成②

第10節 上水流遺跡とその周辺について

(1)はじめに

阿多新田川は、地元では御新田川用水路と呼ばれる用水路で、川辺町田部田の轟堰から万之瀬川の水を引くものである（現在は、その途中である南さつま市金峰町白川からも引いている）。そこからは、万之瀬川右岸沿いに南さつま市金峰町宮崎まで引き、堀川に落とす灌漑用水路である。現在の総延長は、10.819kmで灌漑面積が200haに及ぶ。

この用水路は、島津伊織久近が領有していた阿多の一帯の半月ヶ原の荒地（中岳の西麓、宮崎のシラス台地）を開拓して稼不足を補うために開削させたといわれる。

『鹿児島県維新前土木史』（県土木部1933）には明治年間に（江戸期の石碑が劣化したため）作り直された新田川工事記念碑の内容が掲載されている。それによれば、「川辺町大字田部田字越ヶ原に於いて万之瀬川に堰堤を築く。その位置は、轟瀬の上にして、右岸に取入口を設け幅十四尺、水深五尺の水路を穿ち、川に沿うて北行十町にして右折し、溪澗に入ること五町、左折隧道を穿つて阿多村大字白川に入り西北に向ひ、又北流し字種渡の下に達し、白川の溪流を横断し大迂回して西南に転行し、丘阜の麓に沿うて蜿蜒環流阿多の平野に出て堀川に注ぐ。水路亘長二里十二町、此間隧道三十箇所在り。灌漑面積二百七拾町歩。落成は享保十二年なり、起工の年は確かに記する所に拠り享保九年ならむかと思われる。（中略）新田川開鑿に伴うて原野を開墾し或は畑地を七百石に増加せしめたり」とある。

(2)島津久近について

島津久近は、「金峰町史」などによれば今和泉島津家とされている。ただし、これには疑問が残る。阿多御新田川が完成したのは、享保10（1725）年とされており、今和泉家の再興された延享2（1745）年よりもさかのぼることとなってしまう。

そこで、島津久近について調べてみることとした。まず、今和泉家の調べてみると、島津久近という人物はどこにも出てこなかった。どうやら、今和泉とは関係ないようである。「薩陽武鑑」（尚古集成館1990）によれば、薩州家の島津用久を元祖とする「薩州家准次男家」の、藤原忠榮（薩州家六代義虎の四男）を祖とした5代目に「久近（伊織 織部 権太夫 常山）」がある。

しかし、これだけでは年代が明らかではないので、『鹿児島県史料 旧記録拾遺 諸氏系譜三』も併せて参照した。それによれば、「久近」菊千代・彌市郎・伊織」とあった。①誕生は延宝3（1675）年で、母は島津久守の娘、②元禄9（1696）年に薩州中郷の地頭に補任される、③正徳元年（1711）年太守吉貴公から、次男

以下に「岩越」の姓を賜う。⑤同年、太守吉貴公から、嫡子は代々「久」の字を使ってよいことが許され、次男以下には「用」の字を賜る。 いうことが明らかとなつた。

また、『鹿児島県史』第2巻（鹿児島県1940）には、日置家島津久健・宮之城家島津久方・都城家島津久龍と並んで島津久近が大身分とされたとある。

いずれにしても、島津一族である薩州家とはいえ准次男家としては格別の扱いを受けていることが上記の資料から窺える。しかしながら、「今和泉」との関係は明らかではない。今後、この問題については詳細な検討が必要であろう。

(3)阿多郷と花瀬村

花瀬村は、『鹿児島県の地名 日本歴史地名大系第47巻』（芳即正・五味克夫編1998）によれば、「当村の北西部は阿多郷とよばれ、中世の山城鶴之城（別名阿多城・花瀬城）跡付近に地頭仮屋が置かれ、阿多郷の行政の中心であった。」とある。

阿多についての絵図としては、『阿多郡郷圖』（天保8【1837】年作成・東京大学史料編纂所所蔵）がある。この中には、上水流遺跡付近とみられる場所に「亭保13【1728】年より御新田開 御新田 鮎受原」とある（柳原2005）。また、直前の川の中には「山中瀬立神高さ十八尋（約27~33m程度）」および「岩瀬戸中須」の記述がある。

まず、前者（御新田）についてだが、通常この地域で「御新田」といえば、持林松・渡畑・芝原遺跡が存在する宮崎の水田を指す。これと対照的に、上水流遺跡周辺は現在「御新田」とは呼ばれていない。ただし、「鮎受原」という地名は小字に残っており、少なくとも享保年間に開発された「新田」という意味で「御新田」と記述されたのである。近世以前の集落が現在水田である東側にも広がっていたことが上水流C・D遺跡の調査で明らかである（金峰町2003）。また、調査区域の北東側（T・U-6区）や中央部（J・K・L-7・8区）が人為的に造成された可能性が高いということを考慮すると、遺跡廃絶後に「新田」となったことが想定されよう。

後者については、上水流遺跡から上流約1kmの「古勢（こせ）の滝」の河岸の崖に「立神」が存在することを知り（下野1994を参考とした）。実際にその場所に男根状に屹立する巨岩を確認した。この事実から、「山中瀬立神」と「岩瀬戸中須」については本来よりも下流にずれて書かれた可能性があることが判明した。ただし、万之瀬川の流路については非常に正確に書かれているのでこの「ずれ」については検討を要するといえよう。なお、前者の「鮎受原」については上水流遺跡の隣接地であるので、ずれなどの間違いはないようである。



第217図 本遺跡周辺の孫字

参考文献

- 柳原敏昭2005「中世万之瀬川下流域の様相について－近世絵図を手がかりとして－」羽下徳彦編『中世の地域と宗教』吉川弘文館
 芳一郎正・五味克夫編1998『鹿児島県の地名 日本書紀地名大系第47巻』平凡社
 鹿児島県歴史資料センター叢書1992『鹿児島県史料 旧記 雜錄拾遺 諸氏系譜三』
 尚古集成館1990『薩摩武鑑』
 鹿児島県土木部1933『鹿児島県新前土木史』
 下野敏1991『南薩心象風景スケッチ』『加世田市の民俗』鹿児島大学基層文化研究室・加世田市教育委員会
 横喜久元1994『かごしま・川紀行』かごしま文庫叢 春苑堂

第11節 上水流遺跡出土の鉄関係遺物について

(1)はじめに

上水流遺跡で出土した鉄関係遺物には、明らかな利器のほか、本来の形状や用途がわからない棒状や板状、短冊状の不定形の破片がある。今回、それらについて桃崎祐輔氏（福岡大学准教授）に御教示を得ることができた。以下にその時の御教示内容を含めた本遺跡の鉄関連遺物の概要を述べる。

(上床 真)

(2) 鉄関連の遺構・遺物について

本遺跡出土の鉄関連遺物については、理化学的分析を行っていないので、それらが銅鉄・鋼塊のいずれか判然としないが、曲面をなすものは鉄鍋のような鉄鋳（銅鉄）片ではないかと考えられる。また棒状や板状、短冊状の鋼質のものは10点以上あり、長いものは10cm以上あるが、釘・杭・馬鍼などではない。本遺跡では、多量の鉄滓（楕円形鉄滓・流状滓）、金床石や極の可能性のある敲打痕の

ある河原石、炉跡の可能性のある土坑（土坑A-2・3・4）などがある。このような状況を総合すると、鉄鍋もしくは板状・短冊状の銛鉄素材を搬入し、大鍛冶で鉄素材を生産し、小鍛冶で鉄製品を制作するような環境が考えられる。これらの鉄関係遺物については、今後は理化学的分析を踏まえた検討が必要であろう。

新田栄治氏の研究によれば、中国では宋代のエネルギー革命により鉄生産量が急増し、大量の鉄が輸出商品として東南アジアに輸出された。鉄鍋や鉄鼎の形で輸出されたものもかなりの量に上ったことは宮崎市定氏により指摘されている（宮崎1957）。また、『島夷誌略』（註1）に紹介された鉄及び鉄製品は、このような事情を反映している。東南アジア諸国が大量生産による良質安価な中國鉄を大量に輸入するようになっていたことが窺われる。生産量と品質で東南アジア鉄が中国鉄に劣っていたか、あるいは東南アジア鉄の安定的供給が困難であったことが要因であろう。ケメール時代の全盛期が終わる頃（13～14世紀頃）、東南アジアへ中国で大量生産された安価良質な鉄の大量輸入があった。輸入鉄は様々な鉄製品に加工されたが、製塗用鉄釜は從来製塗が行われていなかった地方にまで普及した。その結果、燃料と塩水がある限り容易に製塗が可能になった。そのことが東北タイに代表される内陸部の在来製塗の市場を壊滅させることになった（新田栄治2006・2007）。

こうした東南アジアの状況を踏まえれば、九州地方でも古代に数多くあった砂鉄原料の製鉄遺跡が中世になって消滅し、また製塗遺跡の消長についても未解明の部分があり、さらに多くの中世遺跡から鉄滓が出土するにもかかわらず、その量は非常に少なく、多くてもせいぜい大鍛冶に伴うもので、製鉄規模のものが見当たらない。という状況を説明できる可能性がある。つまり、宋からの安価な輸入鉄が在来鉄を駆逐し、地域社会は中国からの輸入鉄素材を棒状鋼に加工し、流通させる体制へと移行していったことを推測させる。

これまでにも、国産の鉄材料のみで鉄生産がなされていないであろうことは指摘してきた（廣井1996）が、東アジアを視界においた指摘は近年になってるものである。

(3) むすびにかえて

本遺跡と類似する資料が金丸城跡（大崎町）にある。長さ20cmの釘状製品がそれである。

桃崎氏は「銛鉄は4%程度の炭素を含むのに対し、釘状品は0.2%の低炭素鋼で、類例との比較から、棒状鉄素材とみられ、半製品の素材鋼として流通したと考えられる。ひとつずつ遺跡から銛鉄・鋼の半製品があわせて確認され、一貫工程が推定できることは極めて稀である」（桃崎2007）と述べている。

本遺跡で出土した短冊状の鉄製品には穿孔がみられる

（5・7）。これは流通単位や流通形態を示す可能性がある。

また、金丸城跡では、炉状遺構が19基発見され、遺物も16・17世紀を中心として古くは13・14世紀からみられるので、本遺跡と共通する部分が多い。今後、本遺跡についてさらに掘り下げる場合に参考となるであろう。

本稿は、桃崎氏の御教示がなければあり得なかつた。桃崎祐輔氏に深く感謝してこの稿を閉じたい。

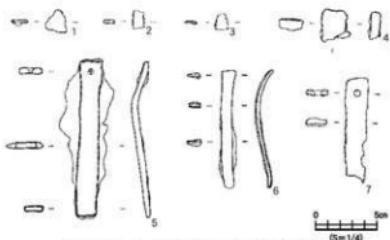
註

- 1 1350年に元の汪大淵が東南アジアで実際に見聞したことについて編纂した史書。14世紀中頃の東南アジア各地の地理や特産物、支配者、人々の風俗習慣、中国との関係などを国や島ごとに紹介している。

参考文献

- 新田栄治2006 「南海貿易史料にみる南宋一元の東南アジアと塩鉄」 小野正敏編「前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義」（科研報告書） 国立歴史民族博物館
新田栄治2007 「6.東南アジアの鉄文化－タイを中心として」『第1回 東アジア鉄文化研究会 東アジアにおける鉄文化の起源と伝播に関する国際シンポジウム』（資料集） 東アジアにおける鉄文化の起源と伝播に関する国際シンポジウム実行委員会 北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館） pp.119-140。
宮崎市定1957 「シナの鐵について」『史料』40-6
桃崎祐輔2007 「中世遺跡出土資料からみた鉄精錬工程とその意義」福岡県二丈町森田遺跡・鹿児島県大崎町金丸城資料を中心に-』『福岡大学金属遺物談話会 第23回例会レジュメ』
廣井雄一1996 「中世における刀鍛冶の居住地」『季刊 考古学』第57号 雄山閣

（上床 真）



第218図 上水流遺跡出土の鉄関連遺物

付編1 東アジア世界を見た龍顔・薩摩における茶の湯文化 -上水流遺跡を定点として-

1 上水流遺跡の性格

(1) 立地と遺構から見て

当遺跡は、龍門すなわち河津(港)である。そのすぐ下流には12・13世紀代の中国陶磁器を多量に出土した持林松遺跡が存在する。これらの港は、河口から約5kmの内陸部に位置することを考えると私貿易港と推定出来る。

(2) 出土陶磁器に見る画期と茶の湯関係品

出土した陶磁器を質・量から判断して、4期の画期を設定した。そこからは、断続的な隆盛が想定出来る。

第I期：12世紀第4四半期～13世紀第1四半期

第II期：14世紀第3-4四半期

第III期：15世紀第3-4四半期

第IV期：16世紀第4四半期後半～17世紀初頭

特に、茶の湯関係品に注目したい。第IIIで做建窯系天目茶碗、瀬戸美濃窯系天目茶碗、IV期で志野唐津茶碗、黄天目唐津茶碗、15世紀後半代の在地系瓦質茶釜3個体、16世紀前半代の在地系土質茶釜1個体、15～17世紀の8個体で3種の地元石材で製作された茶臼が人為的に欠損され、建物群付近の8遺構に廻棄されて出土した。

2 榆林・禪僧・茶人の動向

(1) 國際情報蒐集基地の禅寺

禅寺は、港に隣接して建立されていることが多い。それは、禅寺が東アジア貿易に深く関与していた証明である。そこは今までなく誰もが出入り自由な国際情報基地であり、下克上を許さない禅院茶礼の発進地である。

(2) 外交官としての禅僧

彼等は中国と日本の貿易商人を仲介し、茶の湯文化の発進者である。博多の聖福寺を建立した臨濟宗栄西禪師は、黒之瀬戸で防衛された出水市野田町に1194年島津忠久が創建した感應寺を開山し米ノ津を管理した。元臨濟宗南禪寺の法嗣で1450年に渡海して琉球国王尚泰久の茶頭となった芭隱承波禪師は、本遺跡の上流である南九州市川辺町清水の宝福寺から渡海した。川辺町には、福建・廣東の民間信仰である石敢当が4ヶ所残る。1467年遣明船大内船で雪舟と渡明した臨濟宗禪師桂庵玄樹は、1473年帰國するものの応仁の乱を避けて島津忠昌の招請を受けて1478年日置市東来市来町竜雲寺に入り、後に島津忠昌が開山した桂樹院(島陰院)に移った人物である。伊藤幸司氏は、桂庵玄樹とその孫の文之玄昌は、島津氏の外交文書起草や外交政策に深く関与していたと論じている。金峰町には、禅寺である島津友久の菩提寺の太平山常珠寺正春庵や報恩寺、永泉庵、南源庵、梅春庵、太復庵、1535年移築して来た金龍寺、吸江和尚開山の(曹洞宗)大年寺が存在した。なお、多夫施神社は、養老年

間に唐僧道慈師が建立したとされる。鹿児島市曹洞宗福昌寺を1394年島津元久が建立したように県下には、44の禅寺が現存する。尚、本遺跡に隣接する阿多と白川地域が薩摩における12世紀からの茶業発祥地という一説は、茶都・福建省安溪と同じく茶の栽培に適した霧によるのだろうか。

(3) 堺茶人関氏喜安入道蕃元が琉球国へ

千利休の系統を繼承し島津義久の許可を得て慶長五年(1600)琉球国尚寧王の茶頭となるが、慶長14年(1609)島津氏の琉球国侵攻により尚寧王と共に捕虜となり薩摩に戻ると「喜安日記」(筑波大学附属図書館蔵)は伝える。15世紀後半代以降の禪林関係から茶の湯が島津氏に定着していたからこそ彼は受け入れられと考えられる。

3 歴史資料に見る港

(1) 「海東諸國紀」(朝鮮成宗2・1471年編)の情報力
「三隅浦津」には2本の河川が記されており、「川内川」と「万之瀬川」の存在を意図的に描写している。「同上」に「薩摩州 硫黄を産出す」とあることから明、朝鮮王朝、琉球王国への軍事物資港として注目されていた。1591～1598年描写年代の「河盛家所蔵日本地図屏風」も同じく河川を記す。上水流遺跡の主たる輸出物は硫黄であり、硫黄を輸出するためにつくられたと考える。その硫黄は、上流や近辺の温泉地帯から採集されたのだろうか。

(2) 堺の「河盛家所蔵世界地図屏風」がもつ歴史性

この屏風は、文禄元年(1592)豊臣秀吉が長崎・京都・堺の貿易商に対する朱印船貿易の許可を権威付ける屏風である。秀吉が堺から移行しようとした外港は、その屏風に見る出発港の長崎である。交趾からは、「黒砂糖・蜜・胡椒・金」を輸入している。本遺跡からは、16世紀末葉～17世紀初頭の中部ペタナム・ミースエン・フックティク窯系長胴壺片が2個体分出土した。この長胴壺は交趾からの上記の輸入容器であり、茶の湯の切溜花入に再利用されたものである。また、同時代出土の福建省漳州窯系青花碗・皿は、この屏風に「漳州…白砂糖黒砂糖皿茶碗手之惡物出」との記載から領する。万之瀬川河口の南さつま市加世田寺園には、福建海商の海神・媽祖像と共に奉納された16世紀第3四半期の華南三彩クンディーと果実型水注がある。出土した福建省閩南沿海窯系白磁IV類碗や同安窯系青磁碗(13世紀第1四半期)、漳州窯系青花と媽祖像の存在は、福建海商との深い関係を意味している。

4 島津氏と堺商人との連携

特に、遣明船貿易に関与していた堺市臨濟宗海会禪寺

に帰依していた堺貿易商連は1469年遣明船堺初入港を機に東中國海・太平洋貿易路を再構築した。文明3年(1471)「右衛門尉行願奉書」(島津文書)は、島津氏に幕府印判のない船が堺から琉球国へ向う船を拒否するよう依頼している。文明6年(1474)「室町幕府奉行人連署奉書」(島津文書)は、幕府が琉球国への渡海船と遣明船の中国渡海で島津氏に取り計らいを命令した。それは、1476年堺貿易商湯川宣阿らが請負った遣明船を出帆するための根回しをした文書である。両資料は、島津氏を幕府の東アジア貿易や外交政策の代理人としての位置付けを意味する。さらに、天文22年(1551)「脚踏賣書状案」(大願寺蔵)は、堺の濱より薩摩への頻繁な商業目的の往来を物語る。そして、禅の精神を堅持した大茶人であり堺の政商山上宗二は、屋号が薩摩屋とその茶会記に記するように本店を薩摩に置きながら堺に進出して貿易システムを構築していた。他に、島津氏との関係を補強するものがある。島津氏の家紋である「丸に十文字」と同じ紋が堺市臨済宗大徳寺派南宗禅寺本源院の紋である。その寺には、中国禪僧が伝えたとされる位牌の風習に従い高さ約60cmの二柱の島津氏の黒漆製位牌が安置されている。幼年に京都・臨済宗相国寺に入った冷泉為純の子で近世朱子学者の祖とされ、朝鮮朱子学者姜沆の弟子、藤原惺窓(1561~1619)の日記では、1596年内之浦に来ていた明船の船主與我洲が泉州人と記す。また、肝付町波見(志布志湾)の役人である山下宗安の居館で「十器一陶之茶具盤灯…」と茶道具を見たとある。島津氏と堺とは、貿易や茶の湯禅林において極めて密接な関係にあつた。

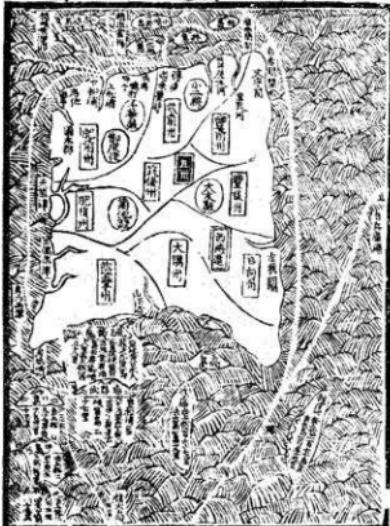
5まとめ

本遺跡出土の陶器や茶の湯関係品は、混乱と安定が交錯する日本歴史や島津氏の歴史と無関係ではない。第Ⅰ期には、平安末葉~鎌倉幕府成立過程における混乱期の1186年摂関家近衛家の惟宗忠久が島津荘の惣地頭に任命された。薩摩・大隅・日向の守護となるのが1197年のことである。第Ⅱ期は、南北朝動乱期の1333・1363年島津貞久とその子が薩摩・大隅・日向の守護職となる安定期である。第Ⅲ期は応仁の乱前後で、島津氏分家の自立と一族の連合が見られる中で禪僧芥延承瑞・桂庵玄樹が島津氏の外交政策に重要な役割を果たした。第Ⅳ期は1574年大隅を支配したが、近世萌芽期の1587年島津義久が博多や堺商人の後方支援を受けた豊臣秀吉に降伏した。以上から、日本の東アジア・東南アジア貿易の要であった薩摩における禪僧の動向、京都や堺茶の湯文化の伝播を示す本遺跡は、島津氏の東アジア外交を支えた歴史的に重要な貿易港である。そして、一片の陶器の光には歴史的な意味がある。本文作成にあたり、新東晃一、池畠耕一、中村耕治、上床真氏をはじめとする鹿児島県立埋蔵文化財センターの方々の御教授を賜った。

引用・参考文献

- 谷川健一編1981『海東諸国紀』『喜安日記』『日本庶民生活史料集成 第27卷 三国交流誌』三一書房
伊藤幸司2002『島津氏の外交文書起草と禪僧』『中世日本の外交と禪宗』吉川弘文館
上東克彦2004『鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩』『ケンディと果実形水注一』『貿易陶磁研究』No.24 日本貿易陶磁研究会
森村健一2007『福建・琉球・堺における禪林と海商 15世紀後半における東中國海・太平洋禪林ネットワーク』『南島考古学』第26号 多和田真厚先生誕百年記念特集号、沖縄考古学会
高柳光壽1930『藤原惺窓傳補遺』『国史学』第3号 国史学会
(森村健一)

図 之州九道海西國木日



第219図 『海東諸国紀』(日本庶民生活資料集より抜粋)



第220図 『河盛家所蔵日本地図屏風』(博文館報第82号より抜粋)

付編2 鹿児島県南さつま市上水流遺跡出土人骨

1はじめに

上水流遺跡からは、中世後半以降の土坑墓が数基発見されている。その中には人骨が残っているものもあった。以下にその特徴をあげる。

2各人骨について

・1号土坑墓出土人骨

右の側頭部（右頭頂骨・右側頭骨）が遺存する。性別は不明である。観察できる頭蓋縫合は内板外板とも癒合していない。年齢もはっきりしないが、少なくとも12歳よりも若いことはない。

・17号土坑墓出土人骨

右上下顎の小白歯以降の歯冠が、すべて遊離歯の状態で遺存しているだけである。歯式は以下の通りである。

⑧	7	6	4	
⑧	7	6	5	4

上下顎の第三大臼歯は咬耗していないことから未萌出の状態であったことがわかる。他の遺存している歯の咬耗はMartinの1度であり、年齢は12~14歳の若年と推測される。性別は不明である。遺存する上顎の大臼歯3本にカラベリ結節は認められない。下顎右第二大臼歯は5咬頭である。

・10号土坑墓出土人骨

右側頭骨から後頭骨にかけての部分が遺存する。外後頭隆起が大きいことから男性と考えられる。観察できるラムダ縫合は内板外板とも癒合していない。年齢は成人に達していた可能性が高い。

・6号土坑墓（桶墓）出土人骨

四肢骨と考えられる、長さ5mm未満の小骨片が十数片遺存しているだけである。年齢も、性別も不明である。

・11号土坑墓出土人骨

脳頭蓋の右半分と下顎が遺存している。右の側頭骨の乳様突起は小さく、女性である。歯は下顎の歯が遺存している。歯式は以下の通りである。咬耗は主にMartinの2度であり、壮年と判断される。

7	6	5	4	3	2	○		1	0	0
---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---

脳頭蓋は左半分が遺存していないが、前後径は長く、長頭であったはずである。

・15号土坑墓出土人骨

全身の骨が遺存しているが、保存状態はよくない。寛永通宝が副葬されていた。頭蓋は脳頭蓋の右半分が遺存している。右の側頭骨の乳様突起は大きく、男性である。年齢は頭蓋縫合の外板が癒合していないことから、壮年の可能性が高い。脳頭蓋は左半分が遺存していないが、前後径は長く、長頭であったはずである。

四肢骨は左右の大腿骨に柱状形成が認められ、激しい運動をしていたことがわかる。

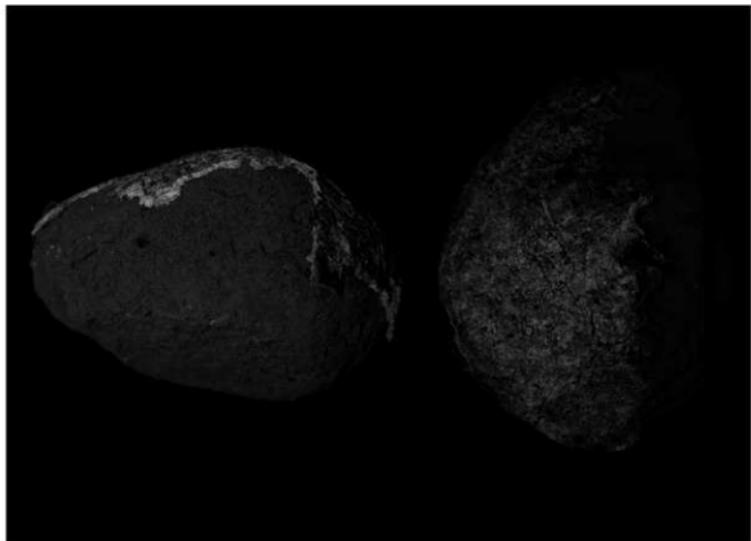
3おわりに

南九州から出土した中世~近世人の脳頭蓋は長頭を示す個体が多いが、南九州の現代人は短頭で、日本列島の中でも短頭傾向が著しいことで知られている。鹿児島県南さつま市上水流遺跡から出土した人骨も中世~近世人骨は長頭であった可能性が考えられる。南九州の近世人には長頭が一般的であり、短頭化は明治以降、短期間に進展した可能性がより強くなったという説を補強する資料となった。今後、中世から近代にかけての古人骨資料の出土が増加し、南九州における近代までの頭蓋形質の時代変化の実態が一層明らかになることを期待したい。

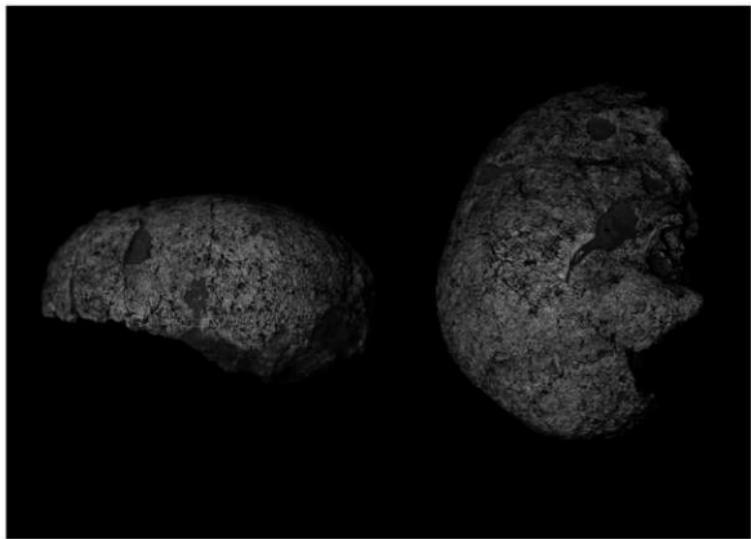
【参考文献】

Martin, R. & Knussmann, R (1988) *Anthropologie*. G. Fischer, Stuttgart

(竹中正巳)



图版54 11号土坑墓出土女性壮年人骨
(上:上面貌 下:右侧面貌)



图版55 15号土坑墓出土男性壮年人骨
(上:上面貌 下:右侧面貌)

觀 察 表

表38 古墳時代住居内出土遺物観察表(2)

編號	住居 番号	遺物 番号	取上番号		器種	色調（外）	色調（内）	調整（外）	色調（内）	石 灰 長 石 青 銅 金 富 命 小 綱 鐵 備 考
			年	月						
24		6	2034	2079	2203	2204	■	■	■	○ ○
		6	2266	2494	2509	2518	■	■	■	○ ○
		7	1063	1656	2342		■	■	■	○ ○
		8	401	1873			■	■	■	○ ○
		9	663	1442	1485	1592	■	■	■	○ ○
		10	1593	1594	1824	1834	■	■	■	○ ○
		11	857				■	■	■	○ ○
		12	700				■	■	■	○ ○
		13	1001	1816			■	■	■	○ ○
		14	768				■	■	■	○ ○
25		15	1824				■	■	■	○ ○
		16	1838				■	■	■	○ ○
		17	658				■	■	■	○ ○
		18	210	1584	1805	1883	■	■	■	○ ○
		19	1458	1530			■	■	■	○ ○
		20	2008				■	■	■	○ ○
		21	159	181	579		■	■	■	○ ○
		1392	1290	1346	1502		■	■	■	○ ○
		1561	1567	1571	1841		■	■	■	○ ○
		1842	1861	1991	2108		■	■	■	○ ○
26		2111	2114	2128	2184		■	■	■	○ ○
		2190	2684				■	■	■	○ ○
		22	2676	2920			■	■	■	○ ○
		23	1865	1869			■	■	■	○ ○
		24	789	988	2432	■	■	■	■	○ ○
		25	2756				■	■	■	○ ○
		26	417				■	■	■	○ ○
		27	1080	1130	2368	2370	■	■	■	○ ○
		2453	2525				■	■	■	○ ○
		28	784	984	1136	1295	■	■	■	○ ○
27		29	1392	2321	2704	2720	■	■	■	○ ○
		30	152	668	669	1025	■	■	■	○ ○
		31	1029				■	■	■	○ ○
		32	267	924	929	1123		■	■	○ ○
		33	1267	1298	1602	1876		■	■	○ ○
		34	2015	2020	2088	2096		■	■	○ ○
		35	2097	2156	2176	2655		■	■	○ ○
		36	2700				■	■	■	○ ○
		37	772	772	1047	1088	■	■	■	○ ○
		38	1393	1391	1443	1544	■	■	■	○ ○
28		39	1545	1815			■	■	■	○ ○
		40	2170	2171	2181	2325	■	■	■	○ ○
		41	800	866			■	■	■	○ ○
		42	1408				■	■	■	○ ○
		43	1556	1827	1829	2382	■	■	■	○ ○
		44	711				■	■	■	○ ○
		45	138	141	406	440	■	■	■	○ ○
		46	570	589	657	1044	■	■	■	○ ○
		47	1039				■	■	■	水素
		48	787	1167	1767	1771	■	■	■	○ ○
29		49	1786	1794	1794	2200	■	■	■	○ ○
		50	2207	2374	2377	2416	■	■	■	○ ○
		51	2417	2419	2741		■	■	■	○ ○
		52	272	272	2708		■	■	■	○ ○
		53	2514	2520	2709		■	■	■	○ ○
		54	42	-18			■	■	■	○ ○
		55	4209				■	■	■	○ ○
		56	2085	2085	2224	2331	■	■	■	○ ○
		57	875				■	■	■	○ ○
		58	980				■	■	■	○ ○
30		59	1105	2117			■	■	■	○ ○
		60	2236	2236	2315		■	■	■	○ ○
		61	2732				■	■	■	○ ○
		62	2500				■	■	■	○ ○
		63	419	484	590	601	■	■	■	○ ○
		64	631	786	792	1045	■	■	■	○ ○
		65	3945	2570	2634	2628	■	■	■	○ ○
		66	771	771	780	1081	■	■	■	○ ○
		67	1101	1281	1294	1296	■	■	■	○ ○
		68	1544	1589	1591	1604	■	■	■	○ ○
31		69	2172				■	■	■	○ ○
		70	184	726	721	972	■	■	■	○ ○
		71	973	974	975	976	■	■	■	○ ○
		72	977	978	979	1672	■	■	■	○ ○
		73	2227	2546	2548	2549	■	■	■	○ ○
		74	710				■	■	■	○ ○
		75	1433	1436	1437	2172	■	■	■	○ ○
		76	2187	2221	2243	2563	■	■	■	○ ○
		77	1043	1567			■	■	■	○ ○
		78	948	951			■	■	■	○ ○
32		79	246	1916			■	■	■	○ ○
		80	141	320	404	480	■	■	■	○ ○
		81	1047	1054	1144	1189	■	■	■	○ ○
		82	1195				■	■	■	○ ○
		83	463	477			■	■	■	○ ○
		84	1156				■	■	■	○ ○
		85	335	409	1069	1156	■	■	■	○ ○
		86	408	1051	1156		■	■	■	○ ○
33		87	19	280	363	1072	■	■	■	○ ○
		88	1045				■	■	■	○ ○
		89	2545				■	■	■	○ ○
		90	1454				■	■	■	○ ○
		91	2545				■	■	■	○ ○
		92	1454				■	■	■	○ ○
		93	2545				■	■	■	○ ○
		94	1454				■	■	■	○ ○

表39 古墳時代住居内出土遺物観察表(3)

編図	住居 番号	遺物 番号	取上番号	番種	色調(外)	色調(内)	調整(外)	色調(内)	石 真	長 石	角 石	富 命	小 綱	綱	備考
31		8	416	重	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○		
		9	125	重	墨褐色	墨褐色	ハケメナデ	ハケメ	○	○	○	○	○		
		10	427	重	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメナデ	○	○	○	○	○		
		11	107	128	重	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○		
		12	195	260	261	262	墨	黄褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	○	○	○	
		284	1008		墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○		
		13	280	374	重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○	
		14	233	247	1032	重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	○	○	○	
		15	31	24	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	○	○	
		16	272	433	1003	1005	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○		
		17	1008		墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		18	383	1061	1002	墨	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	○	○			
		19	153	185	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		20	1007		墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		21	49		墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○				
		22	130		墨	墨褐色	墨褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		23	279		墨	墨褐色	墨褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		24	74		墨	墨褐色	墨褐色	ナダ	ハケメ	○	○				
		25	1181	1196	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
32		116	173	294	285	286	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○		
		26	1027	1085	1102	1104	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○		
		1193													
		27	37	176	447	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○		
		28	305		墨	墨褐色	墨褐色	カズリ墨ナデ	ミガキ	○	○				
		29	402		墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○	○			
		30	194	410	1050	1060	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○		
		1071	1134	1140											
		31	290	295	300	322	墨	黄褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ナダ	○
		32	325												
		33	1046	1145	重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		34	81		重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		35	384		重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		36	259		重	墨褐色	黄褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		37	1073	234	1033	重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	○	○			
		38	307	329	重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ナダ	○	○				
		39	406	1136	重	墨褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ナダ	○	○	
		40	1116	1117	1118	1119	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ナダ	○
		41	1120	1179	1197										
		42	92	98	120	墨	黄褐色	黄褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	○	○			
		43	153		墨	墨褐色	墨褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		44	16		墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○				
		45	182		墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ナダ	○	○				
		46	1019	1081	1133	1178	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○		
		47	1095	1194	1111										
		48	329	375	418	1132	重	黄褐色	黄褐色	ミガキ	ミガキ	○	○		
		49	1185												
		50	293		重	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		51	1190		重	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		52	296	287	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		53	48	121	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		54	336	340	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		55	2	3	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		56	395	1108	1201	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○			
		57	1012	1130	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		58	-16		墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		59	1121	1183	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		60	54		墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		61	-16		墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		62	1155	1191	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		63	314	1190	1565	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○			
		64	1081		墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		65	1010	1029	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		66	291	312	453	1146	高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○		
33		67	631		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		68	1068		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		69	238	246	321	墨	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○			
		70	1182		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		71	1211		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		72	1146		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		73	1084		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		74	1042	1296	重	にじく赤茶褐色	にじく赤茶褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	○	○				
		75	1083	1102	1133	重	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○			
		76	-16		重	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		77	47	102	重	赤茶褐色	赤茶褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	ナダ	○	○	○	○	
		78	1093	1112	1138	重	灰茶褐色	灰茶褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	ナダ	○			
		79	1082		重	灰茶褐色	灰茶褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	ナダ	○				
		80	1212		手環	灰茶褐色	灰茶褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	ナダ	○				
		81			手環	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		82	315		手環	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		83	1215		手環	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		84			手環	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		85			手環	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
34		1	4	9	重	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	○	○				
		2	1	墨	墨褐色	墨褐色	カズリ墨ナデ	カズリ墨ナデ	ナダ	○	○	○	○		
		3	3	墨	墨褐色	墨褐色	ハケメ	ハケメ	ナダ	○	○	○	○		
		4	-16		高环	墨褐色	墨褐色	ミガキ	ミガキ	○	○				
		5			手環	灰茶褐色	灰茶褐色	ナダ	ナダ	○	○				
		6	8	1	墨	墨褐色	墨褐色	ナダ	ナダ	○	○		○		

表40 古墳時代住居内出土遺物観察表(4)

編番	住居 番号	遺物 番号	取上番号	器種	色調（外）	色調（内）	調整（外）	色調（内）	石 質	長 石	青 銅	富 士	小 綱	鐵	備 考	
42	2	一絆	重	縞模様色	赤茶褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○	○	○		
	3	4	26	重	縞模様色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○	○	○		
	4	9	重	縞模様色	黒褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○	○	○		
	5	一絆	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	6	35	重	赤茶褐色	縞模様色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	7	一絆	重	黄茶褐色	黄茶褐色	ハケメナダ	カズリハケメ	○	○	○	○	○	○	○		
	8	31	重	黄茶褐色	白黄茶褐色	ハケメナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	9	16	重	黄茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	10	一絆	重	黄茶褐色	黄茶褐色	カズリハケメ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	11	16	鉢	黄茶褐色	黄茶褐色	ハケメ	ハケメ	○	○	○	○	○	○	○		
43	12	18	鉢	黄茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	13	31	28	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○	○	○		
	14	2	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	15	31	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	16	一絆	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	17	7	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	18	20	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	19	一絆	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	20	一絆	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	21	一絆	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
44	22	20	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	23	6	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	24		皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	25	1	12	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○		
	26	14	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	○	○		
	27	39	50	52	53	皿	黄茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○	○	
	28	31	手提	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	29	32	手提	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	30	5	手提	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	31		重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
45	1	71	91	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○		
	2	19	25	33	重	にじる模様色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメ	○	○	○	○	○		
	3	40	44	49	67	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ミガキ	ナダ	○	○	○	○		
	4	36	37	38	42	鉢	赤茶褐色	赤茶褐色	ハケメナダ	ハケメナダ	○	○	○	○		
	5	一絆	鉢	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○	○	○	○		
	6	41	46	56	57	高环	赤褐色	研磨赤褐色	ミガキ	ナダ	○	○	○	○		
	7	59	60	61	66	高环	赤褐色	研磨赤褐色	ミガキ	ナダ	○	○	○	○		
	8	62	64	66	68	高环	赤褐色	研磨赤褐色	ミガキ	ナダ	○	○	○	○		
	9	69	70	72	76	高环	赤褐色	研磨赤褐色	ミガキ	ナダ	○	○	○	○		
	10	77	85	83	100	高环	赤褐色	研磨赤褐色	ミガキ	ナダ	○	○	○	○		
47	11	78	79	81	86	高环	赤褐色	黄茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		
	12	95	103	104	105	高环	赤褐色	黄茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		
	13	106														
	14	84	88	92	97	高环	赤褐色	黄茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		
	15															
	16	72	74	80	82											
	17	84	88	92	97	高环	赤褐色	黄茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		
	18	94														
	19	34														
	20	11	12	13	17											
48	21	7	1	13	15	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	22	11	15	17	18	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	23	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	24	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	25	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	26	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	27	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	28	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	29	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	30	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
49	31	1	1	1	1	重	赤茶褐色	赤茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	32	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	33	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	34	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	35	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	36	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	37	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	38	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	39	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		
	40	1	1	1	1	重	赤茶褐色	白黄茶褐色	ナダ	ナダ	○	○	○	○		

表49 古墳時代包含層出土遺物觀察表(4)

編 番 号	種類	区 域	X	Y	Z	取上番号	色調(外)	色調(内)	調査(外)	調査(内)	石 器 名	長 石 名	角 石 名	小 便 器	鐵	備考	
126	環	M	-	138.197	51.202	2.911	119433	暗黃褐色	ミガ牛	ナデ	○	○	○	○	○		
127	環	T	2e	69.527	67.840	2.780	25009	赤	ミガ牛	ナデ	○	○	○	○	○		
128	環	T	2	63.223	46.541	3.003	114755	淡黃褐色	ミガ牛	ナデ	○	○	○	○	○		
129	環	Y	2e	15.734	47.239	2.571	123293	淡黃褐色	ミガ牛	ナデ	○	○	○	○	○		
130	環	S	3e	76.434	53.207	2.680	119307	暗黃褐色	ミガ牛	ナデ	○	○	○	○	○		
131	環	S	3e	71.933	59.060	2.772	106144										
		S	3e	71.998	58.514	2.767	106147										
		S	3e	71.491	58.366	2.772	106148										
		S	3e	72.125	58.015	3.448	106151										
		S	3e	72.480	57.629	3.491	106152										
		S	2e	72.805	57.743	3.486	106153										
		S	2e	73.643	58.298	3.471	106177										
		S	2e	73.350	58.321	3.446	106178										
		S	2e	73.461	58.391	3.480	106179										
		S	2e	73.410	58.525	2.765	106641										
132	環	S	3e	74.154	44.761	2.590	129129	赤	白黃褐色	ミガ牛	ハケメ	○	○	○	○	○	
133	環	U	3e	53.768	57.137	2.381	114436	赤	白黃褐色	ミガ牛	ナデ	○	○	○	○	○	
134	環形	S	2e	74.750	56.725	2.705	106643	白黃褐色	ミガ牛	ケズリ	ミガ牛	○	○	○	○	○	
135	環形	U	2e	88.537	58.787	2.935	106271	白黃褐色	ミガ牛	ミガ牛	ミガ牛	○	○	○	○	○	
136	環形	V	2e	49.890	44.465	3.238	125129	赤	赤	ミガ牛	ミガ牛	○	○	○	○	○	
137	環形	S	2e	74.118	58.312	2.615	107041	赤	赤	ミガ牛	ミガ牛	○	○	○	○	○	
138	環形	S	2e	74.043	58.365	2.530	107193	赤	赤	ミガ牛	ミガ牛	○	○	○	○	○	
139	環形	U	2e	53.846	58.382	2.590	106997	赤	赤	ミガ牛	ケズリ	ナデ	○	○	○	○	
140	手握	C-G	2	-	-	-		黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
141	手握	S	3e	77.214	72.342	2.722	25293	赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
142	手握	B	2	-	-	-		赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
143	手握	B	3e	85.351	48.584	2.492	120446	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
144	手握	V	2e	47.183	46.860	4.070	125039	赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
145	手握	S	3e	71.784	63.958	-0.331	127796	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
146	手握	B	3e	90.739	65.958	5.227	250663	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
147	手握	X	2	-	-	-		赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
148	手握	X	3e	62.549	48.528	2.800	117764	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
149	手握	P	3e	64.024	50.011	3.030	116524	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		
150	手握	U	3e	55.561	45.233	3.158	120681	赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
151	手握	S	2	75.188	48.126	2.937	114952	白黃褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		
152	手握	U	3e	50.317	45.339	6.195	124624	黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		
153	手握	R	3e	80.467	50.279	2.729	119532	赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
154	手握	E	-	237.800	91.531	1.775	102674	赤	赤	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	
70	漆器	-	-	-	-	-		深褐色	深褐色								
		-	-	-	-	-		白褐色	白褐色								
		-	-	-	-	-		深褐色	深褐色								
		-	-	-	-	-		深褐色	深褐色								
		-	-	-	-	-		深褐色	深褐色								

表50 古墳時代包含層出土石製品觀察表

辨認	番号	種類	高さ (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	石材	備考
27	60	勾玉	2.5	0.9	2.74	頁岩	
	61	勾玉	0.9	0.4	0.37	緑泥片岩	

写 真 図 版



古墳時代住居跡出土土器①



5号住1



5号住21



5号住27



5号住29

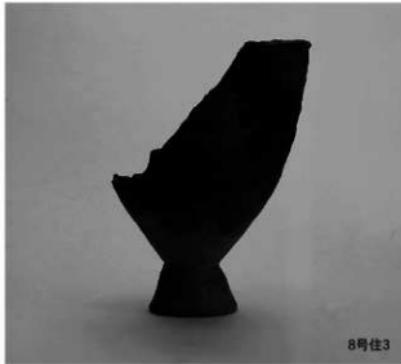
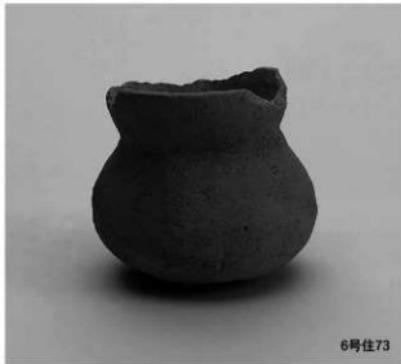


5号住38

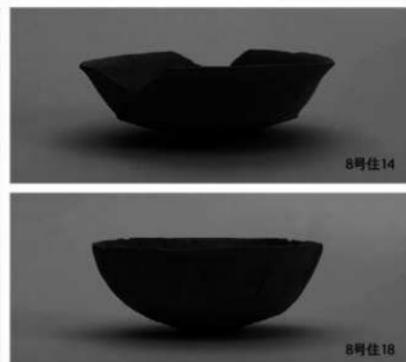


5号住57

古墳時代住居跡出土土器②



古墳時代住居跡出土土器③



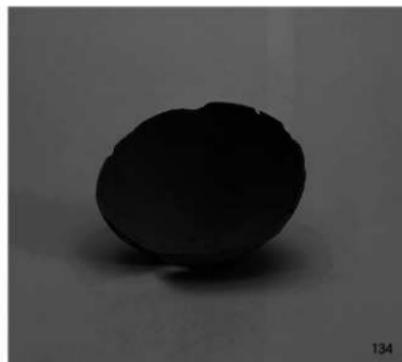
古墳時代住居跡出土土器④



古墳時代住居跡出土土器⑤



古墳時代住居跡出土土器⑥及びその他の土器①



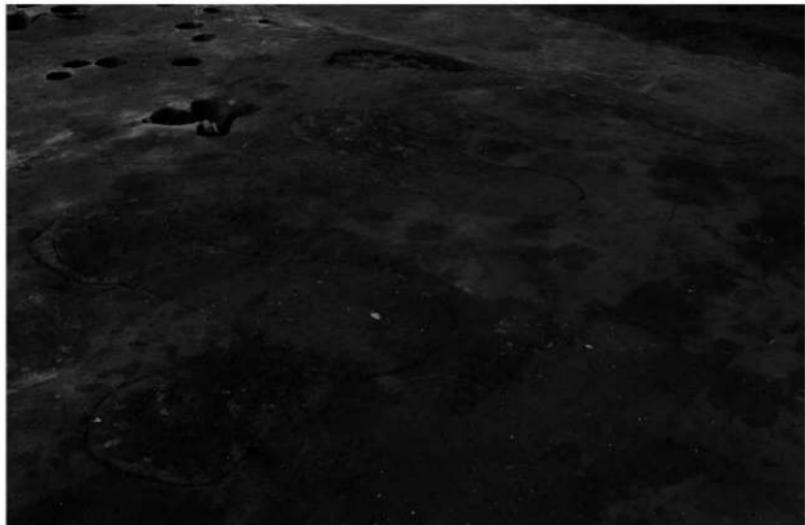
古墳時代のその他の土器②



竖穴建物1号検出状況



竖穴建筑物2号検出状況



左から炉状遺構16号・15号・14号・13号・古道1（南西側からみる）



大型土坑1



大型土坑2



大型土坑3



大型土坑3の階段状部分

炉状遺構・大型土坑検出状況



ピットM8-2



ピットM8-24



大溝の断面

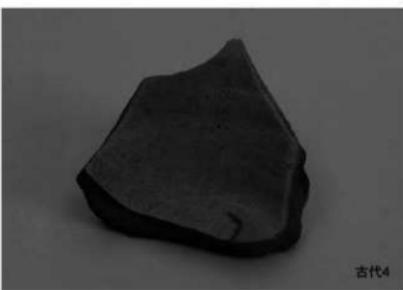
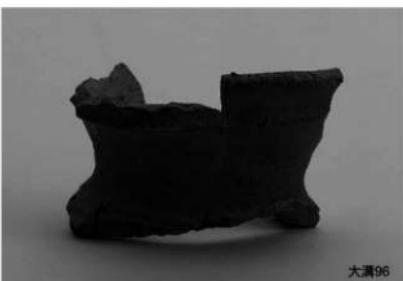


11号土坑墓



15号土坑墓

ピット・大溝・土坑墓 検出状況



古代包含层遗物·中近世遗物内出土遗物①



土器器埋設



大溝229



溝97



溝43



溝103



大溝117

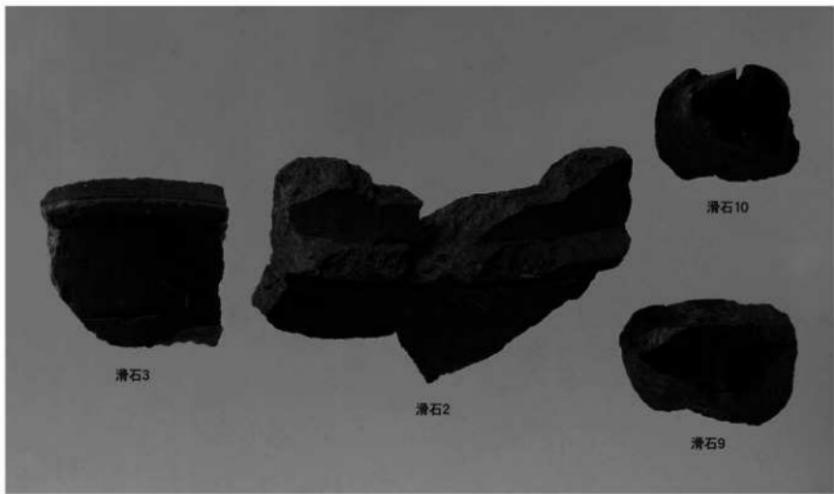
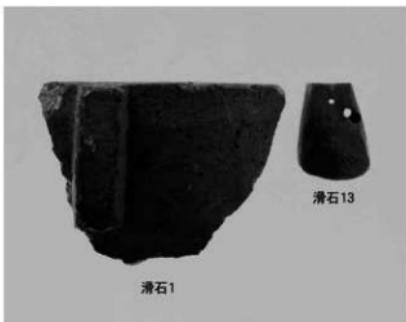


大型土坑86



大型土坑90

中·近世遺構内出土遺物②



中·近世遺構内出土遺物③



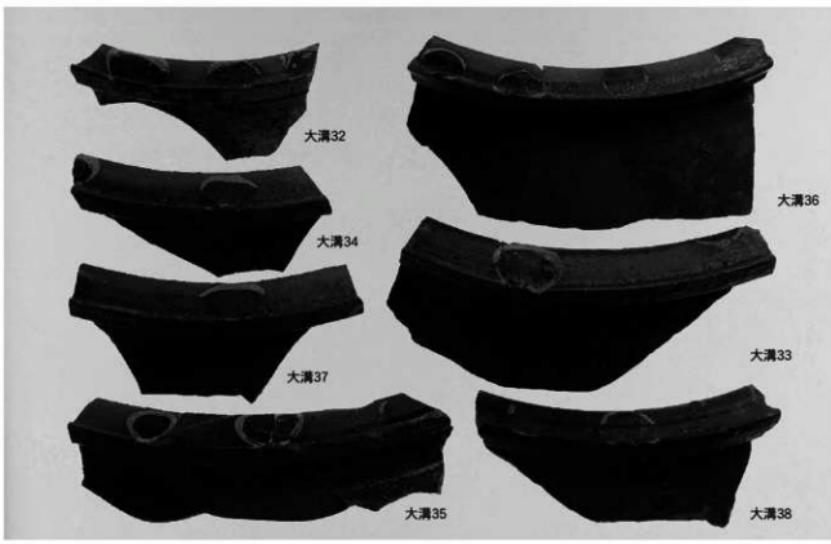
中·近世遺構内出土遺物④



大溝127



大溝282



大溝32

大溝34

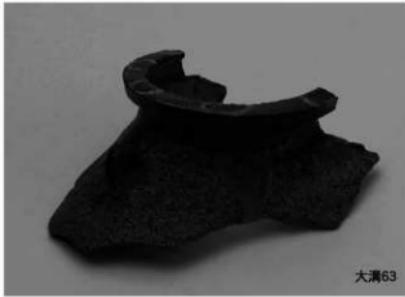
大溝37

大溝36

大溝33

大溝35

大溝38



大溝63



大溝78

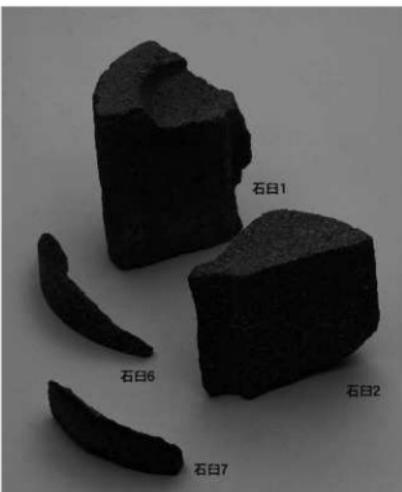


大溝77

中·近世遺構内出土遺物⑤



中·近世遺構内出土遺物⑥



中・近世遺構内出土遺物⑦・上水流遺跡の整理作業員と担当職員

本報告書は古墳時代から近世編についてのものであるが、編集を終えてみて改めてその内容の豊富さに圧倒された。古墳時代と中世ではともに墓葬があり、かつ重要な遺構・遺物が確認されている。調査中から「これはすごい」という声が内外から何度も聞こえてはいたが、まさかこのような河川沿いにこれだけの遺構・遺物が存

在し、また重要なものがこれほど多く含まれていることなど予想だにしなかった。

これらの遺構・遺物の中には、適切な評価を与えることができたとは言い難いものもある。この反省は、他の万之瀬川関連遺跡へ生かしていくこととした。また、今後も継続的に本遺跡について深めていきたい。(U)

調査に関わった方々

発掘作業員

阿久根睦美 阿久根香子 鮎倉他賀子 有蘭千代子 有村未彦 有元キミエ 安藤つゆ子 池畠真理子 石原達義 石間伏広志 今村孝蔵 今村良 今村孝 今村道子 井料満寿 井料信子 井出ヶ原洋子 今門謙 上大田五郎子 上蘭建藏 上蘭光子 上笠操 田内ノブ子 大山健一 大坪雄 尾辻ちひろ 布マリ子 加治屋ミヤ子 片平サクラ 上久保エミ子 神野アキ子 神野勝篤 神野智子 審集まゆみ 川崎和美 川治国治 井健次 川村義博 川原テミ 川路ハナ子 川原嘉一 桑園ヨリ子 勝里美木落よし子 久保敏子 久保次男 古城政美 町城信雄 小牧繁臣 小森利文 小峯成 五反スミ子 板上良光 板下ヨシ子 古坂元子 古坂スミ子 坂野タツ子 鮎島文夫 鮎島マリ子 鮎島カツコ 鮎島キミエ 下大蘭サキ 下大蘭ヒサエ 下大蘭芝原弘光 十田國子 城倉正勝 白間謙章 新橋三郎 清木場ミチ子 下野千男 漢詔藤彌トミ 漢詔藤彌幸夫 園田貞子 立石みづき 田添洋子 楠橋隆雄 鶴田イツワ 津原勝久 寺内桃代 师師マユミ 堂瀬アサエ 堂瀬萬厘子 年永教子 年永舞雄 烏越のり子 田中ヒサエ 中禪アヤ子 中禪四夫 中江イツ子 中島豊文 山中みほ子 中野明浩 中間正信 西前和子 二宮忠二 二宮ひみ子 西田ユミ子 野入高美 長谷川すみ子 岛中茂孝 岛中良節 八田久二 原口久治 原口礎子 原口シヅ子 原口マサ子 原口捺子 原岡裕子 花牟禮イツ子 花立見 東福子 日吉昭明 平田和哉 東小蘭ヨシ子 平山美恵子 久永マリ子 福島リウ子 福水キヨ子 福永健一 古市昭子 藤田政久 藤田正美 前田トシ子

前田裕見子 前原タマ子 前野政治 松下武見 前田みえ子 牧陣雄 松山影行 前野ヨシ子 南道子 南良子 宮下麻貴子 宮籬イチ子 宮内敏郎 南ヨシ子 南ヨシエ 宮里サツ子 森川伸子 森勉 森田幸子 森田裕一 宿利哲夫 山口正人 山口順子 矢崎則夫 横田利男 吉留美紀子 吉留ミチ子

整理作業員

浅山順子 有川ひとみ 有村貴子 池田真弓 石井涼子 石坂きくえ 市齋厚子 石坂啓子 井出上福代 今村智子 稲留文子 今西ゆかり 植山ひろみ 海老原弘子 大田雅子 大保裕子 大村正紀 小倉ひろ子 小田原美保 落合由美子 乙幡佳子 柏木節子 柏木子 柏原千鶴 加藤明子 川野高子 上赤世津子 北道成子 須田千秋 古賀野美智子 小蘭久美子 後藤ひろみ 木島恵美 小中由美子 繁田保子 栄素子 追間洋子 佐土原恵 鮎鳴みどり 重久ひとみ 下入佐正子 新總より子 末川草谷子 末川七々恵 末原智子 末原夏美 漢口俊子 竹ノ内礼子 田中美佐枝 田上ノ輝美 田實美徳 田代留美 立山佳代子 田潤一 垂門加世 鶴みづ子 寺田美幸 田井明子 中川ヒロミ 中川原聰子 水井絹子 長澤みどり 水田和子 水田ひとみ 長友みゆき 中村敏江 西清子 西浩司 西川明美 西川貴浩 西園聰子 西田のり子 野辺由美子 原田ゆかり 橋口まゆみ 橋口晶子 東国原ゆかり 福園とし子 福留良映 藤田みどり 古里智恵子 別府祐子 松平ひとみ 松下奈津美 松村郁美 真野さゆり 丸山みゆき 宮坂多美子 宮原紀代 毛井恵子 持田好子 森山優子 八ケ代祐子 山下貴子 山元順子 吉岡美喜

なお、上記のほか発掘調査から報告書作成に至るまで以下の多くの方々の御指導・御教示・御協力をいただいた。
赤塚志保 綱田龍生 石田和泉 桐原拓 板倉佳代子 岩永勇亮 池田榮生 上田耕 上東克彦 大野薦 畠岡章一 甲斐康大 加藤武司 川上岩男 川口雅之 河瀬正利 切通雅子 久保智康 久保弘幸 梁林文夫 黒住耐二 桑波田武志 倉元良文 黒田恭正 児玉健一郎 鮎口英毅 相美伊久雄 佐藤聖亜 佐藤真人 新里貴之 新留美香 住田雅 和闇一 高倉洋彰 竹下国光 立神勇志 丹治康明 土橋陽子 鶴田静彦 植谷泉二 善昌込秀人

德田有希乃 永濱功治 永山修一 中村直子 西田茂 西園勝彦 新田栄治 野間口勇 橋口拓也 橋口亘 橋本達也 林匡 菊盛加 東和幸 日高勝博 日高泰文 日高正人 楢原次郎 福永修一 福水裕曉 福島吾意子 藤井大祐 藤尾慎一郎 本田道輝 前追亮一 馬鹿亮島 松田朝一 真邊彩 宮下貴浩 宮地聰一郎 村上恭通 桃崎佑輔 森内秀造 八木澤一郎 柳原敏昭 山中一郎 山元宏子 横手浩二郎 吉岡弘 羅善華 渡辺芳郎 和田るみ子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)
中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(III)

上水流遺跡2

古墳時代から近世編

発行年月	平成20年3月
発 行	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	〒899-4318
	鹿児島県霧島市国分上野原繩文の森2番1号
印 刷 所	(099) 48-5811
	（株）プリントイング三州
	〒892-0871
	鹿児島市吉野町5501-4
	(099) 244-3334

